
落ちこぼれと美鬼

The ROCK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちこぼれと美鬼

【Zコード】

Z2761W

【作者名】

The ROCK

【あらすじ】

闇にはびこる『鬼』の討伐を生業とする『伏鬼衆』でありながら、落ちこぼれの烙印を押された少年・鈴也。

伏鬼の名門・御堂の家を飛び出したはいいが、彼を連れ戻そうとする従兄妹・貴子との追いかけっこ日々は終わらない。

ある日、鈴也は夜の公園で、人外の美貌を持つ少女・紫炎と出会い、利害の一致と勘違いから、2人はとある契約を結ぶことになるが…

1 (前書き)

どんなもんかな、と思って投稿してみました。
お手汚しですがどうぞ。

闇は恐怖を司る。

人知れず暗躍する異形の存在　『鬼』。彼らが蠢くのが闇の中であり、彼らの存在はまさに、人間にとつて恐怖以外の何物でもない。

現世の闇にまぎれ、人を食む妖しの物。抗う術のない者はただ餌食となり、人は闇を恐れるようになつた。それでも、人間に対抗手段が残されていなかつたわけではない。特殊な鍛錬の末、『鬼』を討つ力を手に入れた者がいた。

彼らが持つ剣は、堅固なる『鬼』の皮膚を切り裂く事ができた。彼らの使つ術は、強大なる『鬼』の生命を削り取る事ができた。

人を守るべく鬼と戦い続けるその一族を、『伏鬼衆』といった。

闇を恐れる人々が、眠りについているであろう時刻。こんな時間に外を出歩いている人種など、1つしかない。

御堂鈴也は夜道を走つていた。そして、御堂貴子も走つていた。鈴也が逃げて、貴子が追う。2人の距離は一向に縮まらない。

貴子が必死で走つているのに対し、鈴也にはまだまだ余力がある。貴子が走りにくそうな巫女装束を着ているのも、この鬼ごっこが終わらない理由の一つだろうか。鈴也はTシャツにジーンズ、ジャケットという身軽さ。だが、2人の距離は広がりもしていなかつた。

「待ち…なさい、鈴也！」

貴子の叫びが、夜の静寂を切り裂く。ここが公園でよかつたと、鈴也は思う。住宅街なら安眠妨害になるところだ。

「もう、逃がさない、から…」

走りながら叫び続けたのだろう、貴子は息も絶え絶えだった。無

理もない、気がつけば1キロほども必死で走っていることになる。

ストレートの髪が汗に濡れて、まるで黒い絹のようだ。

「おとなしく、家に、戻つて、きな、せいー。」

「やだね」

鈴也は器用に、振り向いたまま走っている。諦めたのか、貴子の歩幅がみるみる縮まり、やがて草履を引きずる音が響いた。そろそろ限界だ。

「仕方、ない、でしょ、鈴也なんて、弱いん、だから…。」

足を止めた貴子はもはや、肩で息をしている。今なら確實に逃げられるだろう。だが、鈴也もまた、後ろを振り向いたまま走るのをやめた。

「み、御堂の、家の、者が…下手な、『鬼』に、やられ、たら…。」

「『伏鬼衆』名門の名折れか？」

鈴也の声は、自然と冷たく硬いものへと変わっていく。鈴也の両親が亡くなつた時の、御堂家の反応を思い出していたからだ。

鈴也の両親は、15年近く前、幼い鈴也を連れて本家を出ている。伏鬼衆として才能の片鱗を見せることもできない我が子に、普通の生活をさせようとしたと聞かされている。だが、名門としての体裁を守るため、落ちこぼれの鈴也を両親もろとも放逐したのだと、鈴也自身は思つている。厳しい周囲の目に、両親が耐えかねたのかかもしれない。詳しいことは聞かされなかつたが、本家を出た両親は「落伍者」としてひどく迫害されたはずだ。それぐらいやつてもおかしくない家だつた。

両親と鈴也は本家の日、そしてしがらみから逃れ、ひつそりと暮らし始めた。父は伏鬼以外の仕事を見つけ、細々としながらも平和に過ごしていた。だがその平和は、3年間しか続かなかつた。小学校入学を迎えた年のある日、鈴也が鬼に目を付けられたのだ。そして、両親は鈴也を守るべく戦い、その鬼の手にかかつて命を落とした。

鬼は本家人間たちによつて撃退され、幼い鈴也は本家に連れ戻された。誰一人、両親の死を悼む人間などいなかつた。それどころか葬儀さえ行われず、その死は「家の恥」として隠匿された。

それが、御堂本家の出した結論だつたのだ。

「そうよ……御堂の者が、鬼にやられるなんて、あつてはならない、事なの！」

貴子は、少し逡巡してから言つた。手にしていた白木作りの小太刀を、鞘のまま鈴也に突きつける。少しほ息が整つてきたりしい。「いくら』はぐれ伏鬼』を氣取つても、鈴也がやられたら御堂の名に傷がつくわ」

鈴也は心中で「望むところだ、傷だらけになればいい」とつぶやいた。当然、貴子に聞かれたら面倒なので声には出さない。

もつたひないな、と鈴也は思つた。貴子はせつかく美人に生まれたのに、御堂の家の事となると途端にヒステリックになる。名門に生まれながら、低い能力しか持たない鈴也をなじる時、あるいは自分が能力を誇らしげに語る時、彼女の顔は鈴也の苦手な顔になる。

（御堂の家の奴らと同じ顔して……）

「何を、じろじろ、見てるのよ……？」

「……別に」

「……そう」

貴子はもはや語る言葉もない、とばかりに、手に持つていた小太刀を構える。鞘を払わないのは従兄妹としての情か、それとも刃を使つまでもないということか。いずれにせよ、貴子が本気で攻撃の意思を見せたことに、鈴也は軽い衝撃を受けていた。

（貴子も、あいつらと同じなのか……？）

両親を失い、御堂家の離れで孤独に暮らして10年間。その間、自分から鈴也に声をかけてきたのは貴子と、1人の使用人の女性だけ。かけてくる言葉はきつても、自分に構ってくれる貴子の存在は、鈴也にとつて救いだつた。その彼女が、今は自分に武器を

向けている。鞘のままとはいえ、危険なことに変わりはない。

「これ以上、一人で伏鬼を続けるつもりなら、手加減しないわよ！」

「つーーー！」

自分の声を合図にするかのように、貴子が前へ跳んだ。鋭い踏み込みで相手の懷へ飛び込み、急所へと確実に小太刀を打ち込むのが、貴子のスタイルだ。スピードを生かすため、小太刀という小ぶりな武器を使っている。腕力のなさをハンデではなく、逆にメリットにしているのだ。

鈴也からすれば、完全に虚を突かれたというしかない。

（もらつたーーー！）

貴子は心中で快哉を叫ぶ。傷つけるつもりはない、ただ鳩尾に突きを打ち込み、鈴也の動きを封じるだけだ。身構える前の鈴也に一撃を加えられる、絶妙のタイミング。

ただし、貴子のコンディションが万全だったなら、の話だが。

「えつーーー？」

叫んだのは、鈴也ではなく貴子だった。

鈴也との戦いで体力を使い果たしていた貴子の足は、思い通りには動いてくれなかつた。踏み出した右足がふらつき、軸にしていた左足に引っかかる。つんのめる上半身。だが、それを支えるはずの右足はまだ地についていない。

さきほどまでのキリッとした表情はどこへやら。バランスを崩し、慌てふためく貴子。

「あつ……きやあーーー！」

「うわっーーー！」

遅まきながら身構えようとしていた鈴也からしても、その動きは予想外。自分に攻撃してくるはずの貴子が、体ごと突っ込んでこようとは……。

どしゃ。

貴子と鈴也は、もつれあつたまま地面に倒れ……。

「こつて…何やつてんだよ、貴子…」

もつれあつて転ぶといふことは、1分の隙もないほど密着しているということだ。そして、鈴也が顔を起こすと、そこには巫女装束に包まれた柔らかなふくらみが。ふによ、といふ感触を顔面に感じる同時に、鈴也は自分の置かれている状況を理解した。

「きやああああ…！　何やつてんのよ鈴也あ…！」

次の瞬間には、思い切り頬をひっぱたかれていた。

「理不尽にもほどがある…」

じんじんと痛む頬をなでさすりながら、なんとか貴子の下から這い出る鈴也。まあ、役得の代償と思えば、安いものだったかもしねい。鈴也の頬が赤いのは、決して叩かれたからだけではなかつた。

「ほん

咳払いをしたのは、鈴也か貴子か。それとも、両方だつたかもしれない。

「まあ、アクシデントだ。気にするな」

鈴也は務めて冷静に言った。自分の胸元を隠すよつた姿勢のまま、真つ赤な顔で睨んでくる貴子から、つい、と目をそらす。

「あなたは、ちょっとくらい気にしなさいよ…」

そんな貴子のつぶやきも、鈴也には届かなかつた。

「ちょっと、聞いてるの…？」

悔しそうな腹立たしいような色をにじませて、貴子が続けるが、鈴也はあさつての方向を見たまま。その視線の先には、綺麗に剪定された植え込みがある。

「……貴子、あれ…」

鈴也の視線は、植え込みの奥に向いていた。そこには、すらりとした人影が。

「何よ……って、あれ、誰かいる…？」

こんな夜中に外をうろついているのが、ただの人間であるはず

がない。

人影が、音もなく動いた。植え込みを避けるように回り込んで、鈴也たちのいる通路に、するりと現れた。

月明かりの下、漆黒の衣に身を包んだ人影は、人外の美貌を備えていた。

腰まで届く、真っ白な長髪。透き通るような白い肌の中で、ただ唇だけが血のように赤い。いや、良く見るとその瞳も、深い紅の色を宿している。

スツ…と、静かに人影が手を上げた。精緻を極めた彫刻を思わせる、白磁のような纖手が、ゆっくりと鈴谷に向けられる。

「来い」

人影が、静かに告げる。

その声を聞いて、初めて貴子は人影が女性であることに気がついた。体型を見れば一目瞭然だつたのだが、あまりに異様な美貌を前に、気が回らなかつたのだ。

その直後、女の言葉が鈴也に向けられたものであることに気づき、貴子は狼狽する。

「鈴也、やめなさい！」

声に釣られるように足を踏み出した鈴谷に向かつて、思わず貴子は叫んでいた。

1 (後書き)

文字数の都合で、半端なところで切れました。

鈴也はただ綺麗な女の子に惹かれているだけだと思つてゐるに違いない。だが、あの女はそんな生易しい存在ではない。全身を刺すような鬼気を発しているのが、なぜ判らないのか。

「その女から、離れなさい！」

重ねて叫ぶが、鈴也の足は止まらない。そのとき、鈴也の前に立つ女が、ゆっくりと息を吐いた。まるで、ため息をつくよつこ。「ああ……やつと見つけた……」

涼やかで、大人びた声だった。血のように赤い唇からこぼれる声は、同じ女である貴子さえ、思わずゾクリとするなまめかしさを持つていた。これは、まずい。

そう思つたときには、鈴也と女の距離が詰まつていた。

「離れて！ その女は……」

間違えるはずもない。人並みはずれた美貌だけではなく、気配が人間のものではないのだ。鈴也はそれに気づく間もなく、女の鬼気に打たれて身動きもできなくなつてしまつたに違いない。だが次の瞬間、鈴也はこともなげに言い放つた。

「鬼だろ、おまえ？」

「そうだ」

実にあつさりしたやりとりだった。聞いている貴子が呆気にとられたほどだ。が、貴子はすぐに顔を真つ赤にして怒りをあらわにする。

「ちょっと鈴也！ 何をのんびりしてるの！」

鬼だとわかっていて、なぜ鈴也は何もしないのか？ 伏鬼の名門たる御堂の者の態度ではない。少なくとも、その名に誇りを持つてゐる貴子からすれば、鈴也の態度は見過せざるものではなかつた。もつとも、見過せない理由はそれだけではないのだが……それを声高に言つるのは、貴子としては抵抗がある。

「刀を抜きなさい、鈴也！」

そう言いながら、貴子は素早く小太刀の鞘を抜く。さつきはみつともなく転んでしまったが、本物の鬼が目の前にいるとなるとそれはいかない。精神力と怒りと、ほんのちょっとのモヤモヤした気持ちを活力源に、貴子は猛然と女に突進していく。

「鈴也から離れ…じゃなかつた。散りなさいっ！」

もう鬼ごっここの疲労から回復したのか、貴子の足取りはしつかりしたものだった。女と鈴也の間を割るように滑り込むと、そのまま構えた小太刀を一閃する。

「あ、おい…！」

キン、と澄んだ音が辺りに響いた。

小太刀が鬼の皮膚を切り裂いた音ではない。その証拠に振り払い小太刀の刃は、根元からぼっきり折れていた。

「なつ…！？」

「おお、すげえ」

「何を感じてるのよ…！」

得物を折られた衝撃から、貴子は一瞬で立ち直った。間の抜けた鈴也の声が、貴子を苛立たせる。

「後にしろ」

とん、と女が貴子の肩を押す。

「きやつ！」

それだけで、貴子は勢い良く地面に転がつた。いつたいこの女は、どれだけの膂力を秘めているのか。

だが鈴也は、そんな事はまったく気に留めていなかつた。貴子の着物の襟元が大きく開き、胸の谷間がしっかりと見えてしまつていつからだ。いくら名門の家に生まれた伏鬼衆とはいえ、これでも鈴也は思春期の男の子なのだ。露出度ゼロの超絶美女よりも、胸元全開の幼馴染に目を奪われたとして、何の不思議があろうか。

「まだ、上があつたか」

鬼が抑揚のない声でつぶやいた。

「ちよつと、ぼーっとしてないで手伝いなさいよ。それでもあんた、御堂の……」

鈴也に遅れること十数秒、初めて貴子は気づく。何やら、自分の胸元がスースーすることに。その間、鈴也の視線がずっとそこに注がれていた事にも、遅まきながら気がついた。

闇をつんざく貴子の悲鳴。次の瞬間、貴子の鋭い視線が鈴也を貫

「なに見てんのよー!」

「わっ、落ち着け貴子！ 相手が違うだろー。」

慌てて襟を深く含わせて立ち上がった貴子は、折れた小太刀をふんぶん振り回しながら鈴也に突つかかっていく。が、その小太刀は、横合いからするりと伸びてきた白い手につかまれた。

裂帛の気合をこめて、貴子は鬼の手を振り切ろうとする。だが、鬼は掴み取った貴子の腕を巧みにひねり上げる。痛みに顔をしかめながらも、空いた左手で拳を作り、鬼の顔面を狙う。

わざらわしそうに、鬼は貴子の左手をも受け止め、背後から腕ごと抱きこんでしまった。じたばたともがく貴子を軽々と持ち上げると、そのまま朱色の袴に手をかける。

「下を剥いだらどうなるのか、見せてみる」鬼の言葉は、鈴也に向けられていた。

「十九.....？」

「うう、うう」と、あんた何するの？
不思議に、貴子の血の気が止む。

鈴也はわけがわからないまま、何となくドキドキしながら事の成

り行きを見守るのみ。

「見せろ、人間の男。その極上なる精の極地を」

鬼は鈴也に語りかけながら、貴子の袴をつかんだ手に力を込める。鈴也はその段階になつて初めて、鬼が何をしようとしているのかを理解した。

(こいつ、俺を欲情させようとしてやがる……)

人間の精気は、欲情すればするほど質が高まるという。貴子の服を剥ぐことで、鈴也を興奮状態に導く事こそが、この鬼の目的だ。鈴也自身にとつては身の危険、貴子にとつては…まあ、いろいろな危険が迫っている。にもかかわらず、鈴也は貴子の袴から田が離せない。しつこいようだが、鈴也は思春期の男の子なのだ。

「嘘でしょ！？ ちょっと…いやーっ！ やめてやめて、やだーっ

！！」

袴をつかんだ鬼の手が、無造作に動いた。

びりいいいっ！！

「あ」

鈴也の間抜けな声。

引き裂かれ、ぼろ布のようになつて鬼の手にある朱色の袴。なぜかはだけている貴子の着物。

そして、その隙間から覗く下半身…といふか、真っ白な下着。

「きやあああああああああああああああああああ！」

そして貴子の絶叫。

「見るな、見るな見るな見るなーーーっ！！」

わめきながら、じたばたともがく貴子を、鬼は無造作に投げ捨てた。

「へ？」

先ほどの鈴也よりさらに間抜けな声を出す貴子には田もくれず、鬼が鈴也に近づいていた。

「ああ…もう限界だ」

がしづつと鬼が鈴也の顔をつかんだ。これはもう、抵抗するだけ無駄だ。鈴也には、貴子を片手であしかづきような鬼をどうにかする術はない。

「えーと… できれば死なないよ！」、よろしく頼む

せめて命はかりは

「了解した」

「ちよつと鈴也、何言つてんのナニカ？」

貴子が慌てて立ち上がり、すんすんと歩み寄ってくる。

馬走はたる】

そ、言へど 兎に鉄世に顔を近づけた
不穏な気配を感じた貴子の足が速度を上げる。

待たなよ、せんせいよあんた！」

だが、鬼は貴子より素早かつた。貴子の手が鎌也

絶叫したのは、鈴也ではなく貴子だった。

「何してくれてんの！」
利：それ
利の：しゃなくて
離れたさし

何やら錯乱して叫び散らしている貴子の声を、鈴也はどこか遠くに聞いていた。いや、むしろ遠ざかつて いるのは自分の意識か。（う…力が抜けるな…精氣を抜かれるとこうなるのか…いや、しかし柔らかいな、唇…つて、それどころじゃないか。そういえば、貴子つて和服でもパンツはくんだな。あ、でもブラジャーはしてなかつたけど…それにしてもこの鬼、美人だなあ…）

脇腋とする中で、鈴木の題^{トキ}は支離^{シライ}漏洩^{ロウイ}剥^{ハグ}た

持ちいいし、このまま寝てしまおう)

後ろでは、まだ貴子がぎやーぎやーとわめいている。腕を引っ張られる感覚があるので、鈴也を鬼から引き剥がそうとしているのだわう。

「10秒ほども吸われただろうか。鬼の唇が、ゆっくりと離れていく。

「ふう……なんとも極上な」

美女との口付けの余韻に浸る余裕もなく、今にも倒れそうな鈴也。その体を、鬼はしっかりと支えている。貴子にはその姿が、「これはもう自分のもの」と主張しているように思えた。

「鈴也！ 鈴也、しつかりしなさい！」

がくんがくんと揺さぶられても、鈴也の意識はぼんやりしたままだ。そして、鬼が鈴也を離す気配もない。

（あ～…もういいや…疲れた…寝ちゃえ）

「ちょっとあんた、鈴也を離して！ 返しなさいよ！ 聞いてるの？」

「ねえ！！」

ヒステリックな、あるいは必死な貴子の声を遠く聞きながら、鈴也は自分の意識を手放した。

目が覚めたとき、鈴也は自分の部屋にいた。

貴子の前で倒れてしまつたのだから、御堂の本家に連れ戻されたかと思ったが、間違なく自分の部屋だ。目の前のラックに並んだ、お気に入りのお笑いDVDを見て確信する。厳格で知られる伏鬼の名門・御堂本家の邸宅に、こんなものあるはずがない。たぶん。

ここは5年ほど前から、鈴也が住んでいるマンションの一室。LDKで、以前は両親もいたが、今は鈴也が一人で住んでいる。ちなみに父親が買ったこの一室を、御堂本家が処分しなかつた理由は知らない。

「起きたか」

「うわっ！」

なんとなく現状を把握しつつあつた鈴也は、突然かけられた声に驚いて上半身を起こす。目の前にいたのは、絶世の美女だった。鈴也の記憶が正しければ、この美女は鬼だ。どうやら、昨晩のことは夢ではなかつたらしい。

「えーと…名前、聞いたつけ？」

「紫炎だ、人間」

短く答える鬼。

さて、何から聞けばよいものやら。とりあえず…

「人間は俺以外にもいっぱいいるから、名前で呼んでくれ。鈴也だよ」

「理解した」

せつかく教えたんだから、呼んでみてほしかつたが、それは後回しでいい。何よりも、まず状況を知りたかった。

「よし。じゃあ確認だ。あれからどうなつた？」

「質問の意味がわからない」

「貴子はどうした？」

「誰だそれは」

まともな返事が返つてこない。それにしても昨晩の出来事の中で、貴子の存在をここまで無視するとは大胆な鬼だ。貴子の方は必死で突つかかっていたし、何より彼女は伏鬼衆。紫炎からすれば天敵といつていいはずなのに。

「まあいいか。で、どうやってここへ？」

「歩いて」

「いや、せうじやなくして」

「？」

小首をかしげる紫炎。あ、かわいい…といつ感想は、口には出さなかつた。

「何でお前がうちにいる？」

「ここが鈴也の家だから」

「いや、ちょっと意味がわからないぞ」

紫炎の受け答えは不明瞭で、鈴也は困惑する。が、どうやら彼女は自分を家に連れ帰つてくれたようだ。だが、どうやって？ 貴子が紫炎に、素直に鈴也の家を教えるとは思えない。もちろん、鬼に連れ去られる鈴也を見逃すとも思えないが、まさか…。

「昨日、俺と一緒にいた女を覚えてるか？ 彼女は？」

「つるさい雌だった」

「雌つて言うな。あと感想を聞いてるわけじゃない。で、どうしたんだ？」

「知らない」

「…えーと、お前が俺を連れてこようとするとき、あいつは何か言つてたか？」

「正直、めんぢくさい会話だ。だが、鈴也は我慢強くてたゞねる。

「聞いてなかつたからわからない」

「ん~…まあ、無事そだからいいか。で、お前はなんでこの家がわかつたんだ？」

鈴也が、一番疑問だつたことをたずねると、紫炎はきょとん、と

した表情を見せる。整いすぎるほどに整つた顔立ちには、あまりに合わない表情だった。

「『契約者』だからだが」

抑揚のない声ではあつたが、どこか呆れたような雰囲気を感じる。鈴也としては、そんな反応をされる筋合いはないのに。

「『契約者』？ 鬼が人間と結ぶ、あの『契約』か？」

ろくに指導を受けていないとはいえ、鈴也も伏鬼衆のはしぐれ。鬼にまつわる知識も、ある程度は持つてている。自分の頭の中の引き出しをひっくり返して、『契約』に関する記憶を引っ張りだす。

鬼の中には、定期的な精氣の供給を条件に、人間と共生関係を結ぶ者がいる。特定の相手の精氣を鬼が気に入つた場合や、相手に対して執着を示した場合、その『契約』は成立するといつ。

「俺、そんなの結んだ覚えないんだけど」

確かに昨日は、一方的に精氣を吸われて気絶しただけだ。『契約』を結んだ覚えも、何かの約束を交わした覚えもまったくない。

「確かに『契約』した」

「待て待て、ちょっと、本気で覚えがないんだ」

そもそも鬼との『契約』なんて、どうやって結ぶかも知らないのに。と、そこに思い至つたとき、鈴也の胸をいやな予感が駆け抜けた。

「紫炎…念のために聞くが、『契約』ってどうやって結ぶんだ？」

「口約束して同意の上で精氣を吸う」

鈴也が思つていたより、だいぶ手軽に結べるようだ。が、どう考へても『契約』を約束した覚えはない。

「鈴也が私に『死なないように守れ』といい、私は『了解』した。その後に私は鈴也の精氣を吸つた。『契約』完了だ」

「ちょっと待て！」

慌てて紫炎を静止。まったく記憶にないセリフが混じっている。鈴也は昨日自分が発した言葉を、できるだけ正確に思い出そうと頭をひねる。紫炎と自分が交わした会話は…

えーと…できれば死ないようにな、よろしく頼む。

了解した。

「…あれ？ ちょっと待てよ」

あのセリフは、「精氣は死なない程度に吸ってくれ、よろしく」という意味で言つたつもりだった。だが、言葉だけ抜き出してみると、確かに紫炎の言うように「死なないよう守れ」という意味にも受け取れる。

「日本語つて難しいなあ…」

「昨日の雌も、私の知らない言葉を叫んでいた」

紫炎が小さく頷きながらつぶやいた。感情に任せてわめきちらす貴子の言葉が聞き取れなかつたのかもしれない。

「『ぶらしてないのに』とか『ぱんつみられた』とか」

「…それは覚えなくていいよ」

ちよつとした頭痛を覚えながら、改めて鈴也は紫炎を見る。見れば見るほど美しい。が、恐らくはとんでもない力を持つているのだろう。それぐらいは、伏鬼衆の端くれである自分にでもわかる。ただ、自分と契約を交わした理由まではわからないが。

「まあ、死ななかつたからいいけどさ…でも、お前はよかつたのか？」俺なんかと『契約』しちゃつてさ

「問題ない。ようやく、私の口に合ひ精氣が見つかつたのだ」「どういうことだ？」

紫炎の端的な言葉を必死で要約すると、こうことだ。

ものすごく大雑把に、鬼を人間に当てはめて言えば、紫炎はとんでもないグルメなのだ。それも嗜好の問題ではなく、体質的に高い質の精氣しか受け付けないという。これまで人間界をうろつきながら探し回つてみたものの、彼女の眼鏡に叶う精氣の持ち主はいなかつたらしい。

そんなる夜、突然とてつもない芳香が彼女の鼻孔をくすぐつた。そのタイミングは、はずみで貴子と密着した鈴也が、うつかり興奮してしまつた瞬間と一致していた。紫炎はすぐさま香りをたどり、

2人がいた公園までやつてきて 鈴也と出合つたのだ。

鈴也の全身から沸き立つ精気を見た瞬間、紫炎は彼との『契約』を望んだという。そこへ鈴也自身から『契約』の申し込み（誤解ではあるが）があり、迷わず受諾した。

「えーと…つまりは、貴重な食料だからゆつくり大事に食べるつてことか？」

なんとなく複雑な気分で、鈴也は自分の置かれている状況を整理した。

こんな美女に見初められたのは光榮といえなくもないが、男ではなく食料として、という部分が厭らしくない。相手が鬼であればやむをえないのか。

「てことは何だ、これから先、俺はちょっとずつ精気を搾り取られていいくわけか…」

「死なない程度なら良いと言つた」

「いや、まあ、言つたけどさ」

一回きりと思つたから、という言葉を鈴也は飲み込んだ。
体がもつかな、という心配こそあるが、『契約』したこと自体についてには特に気にはならなかつた。伏鬼衆としてのプライドなど、落ちこぼれの自分には関係のない話だし、目の前の鬼に対する恐怖もなぜか感じなかつた。

と、そのとき。突然けたたましく鈴也の部屋のインターフォンが鳴り響いた。子供が連打しているかのような鳴らし方に心当たりがある。というより、この部屋を訪ねてくる人間など、他にいないのだが。

「げ……やっぱ来やがつた」

『鈴也、いるんでしょ！？ 開けなさい！…』

インターフォンだけでなく、ドンドンとドアを叩く音まで響きだす。近所迷惑になることを恐れ、鈴也は重い腰を上げた。

4 (前書き)

ちょっと短め。

いいじょひく様子を見て、続きを書いてみたいと思います。

「おー、ちょっと静かにしてくれよ。周りに迷惑だろ……借金取りじゃあるまいし」

ぶつぶつ言いながら、鈴也は玄関のカギを開ける。その瞬間、ドアを引っぺがすかの勢いで開けて、貴子が玄関になだれ込んできた。手には風呂敷に包んだ重箱を持っている。

「鈴也、無事なのね！？」

貴子は鈴也の顔を見るなり、その襟首をつかみ、顔を近づけてくる。無事じゃなかつたら、2人して後ろに倒れてしまつほどの勢いだ。じうじう時は、鈴也も貴子が自分を心配してくれているのではないかと思つ。

「おかげさんでな。どうしたんだよ、珍しくうちまで来るなんて」不思議なことに、貴子が突っかかるのも、御堂の家に連れ戻そうとするのも、鈴也が伏鬼に関わろうとしたときだけなのだ。自宅や学校にいる時、さらには刀を持っていないときには、特に干渉してはこない。

「あんたねえ……自分の従兄妹が鬼に連れ去られたのよ！？ 気にして様子を見に来るのは当然でしょ！？」

「ん……それもそうか」

「あと、つこでに……はいこれ」

ぐー、と鈴也に重箱を突きつける貴子。びつやうせんはお弁当のようだ。

「どうせ口クな物の食べてないんでしょ」

慌てたようにまくし立てる貴子。何やら顔が赤い。まあ、普段悪し様に言つている鈴也を心配している事に対しても、照れ隠しのよつなものだと鈴也は認識する。

いずれにせよ、口ではいろいろ言いながら、何かと世話を焼くのが貴子とこう従兄妹の性分だ。これから鈴也も、御堂家の一員とな

はいえ貴子を突き放すことができない。
と、そこく。

「鈴也」

玄関から一向に戻らない鈴也の様子を伺うよつこ、紫炎がぴょこんと顔を出す。『契約』自体が誤解とはいえ、彼女には鈴也を守る義務がある。一方、貴子は紫炎の顔を見るなり、つかみかからんばかりの勢いで、彼女に歩み寄っていく。

「あ、あんた！ なんでここに……！」

「敵襲か、鈴也？」

「ちょっと、無視するんじゃないわよ……」

どうせこれから、貴子には状況を説明しなければならないのだろう。鈴也は、どう話せば自分への被害を減らすことができるのか、それだけを考えながら、リビングへと戻つていった。

「はあ！？ 『契約』したあ！？」

リビングルームに、貴子の声が響き渡る。10畳ほどのスペースで、家具がほとんどないせいが、妙に音が反響する。驚きと怒りで言えば、7：3で驚きが勝つている。といつより、まだ怒りの方向に意識がシフトしていなければいい。

「うん、そちらしい」

貴子が持ってきた弁当をかきこみながら、鈴也はこともなげに頷いた。いろいろ考えてみたが、事実だけを端的に述べることにした。紫炎は貴子にも弁当にも興味がないらしく、鈴也に寄り添つたまま黙つて座っている。

「そちらしいって、あんたねえ……！」

じょじょに怒りのボルテージが上がってきた気配を感じる。氣のせいが、貴子の長い髪がざわざわと揺れているようにさえ見える。

「そんなつもりはなかつたんだけど、成立しちゃつたらしいし……あ、これうまい」

「ほんと？ それはちょっと自信あつ……ってちがう……！」

「忙しい奴だな。しちゃつたものはしょうがないだろ」「しょうがなくない！！」

ドン、とテーブルを叩き、貴子は鈴也に詰め寄った。

「いい？　いくらへなちょこでも、鈴也は伏鬼衆なの。それが鬼と『契約』するなんて、漁師が熱帯魚を飼うようなものでしょ！」

「それは別に個人の自由じやないか？」

ポツリとつぶやく鈴也。貴子も自分のたとえがおかしいことに気づいているのか、うつすらと頬が紅潮しているものの、気にせず続ける事にする。

「そんな事はいいの！　鈴也、仮にも御堂家に生まれた伏鬼衆の一員が、鬼と『契約』だなんて恥ずかしくないの？　昨日だって、あんな、キ、キスとかしちゃって！」

思い出して苛立ちが募ったのか、貴子はだん、だん、と机を叩く。

「いや……あれはただ、精気を吸うための手段だろ？」

「この女はそもそも、鈴也はどうなのよー。『デレ』『デレ』しちゃってたんでしょ、どうせー！」

「う……」

鬼とはいえ、これだけの美人とキスをしたのだ。鈴也としても心中穏やかではないが、それを素直に口に出すのは危険な気がした。

「待てよ、論点がずれてる。要するに、お前は俺が紫炎と戦わなかつたことを責めてるんだろ？」

「あと、鬼に『デレ』してたことも責めてるわ」

「それは誤解……というか、冤罪だ」

話が進まないので、いったん言葉を切つて仕切りなおす。

「戦つてどうにかなるとは、とても思えなかつたんでな。お前を片手であしあうようなやつに、俺がどうこうできるわけないだろ」

ちらり、と鈴也は自分に寄り添う紫炎を見る。つられてそちらを見た貴子の眉が、きゅっと吊り上つた。

「じゃあ何で、そんなにべつたりくつついてるのよ、その女は」「なんで、と言わてもな……おい、お前も何とか言えよ」

鈴也の言葉を受けて、紫炎はやつと田を開ける。めんどくさそうに眉をしかめたままではあつたが。そして、ようやく口を開いたか

と思ひと、鈴也と貴子の思ひもよらぬ言葉を吐き出した。

「私は鈴也なしでは生きていけない体になつたんだ」

「はあああああ！」

貴子の声が、またしてもリビングに響く。叫んだ後、呆然と鈴也を見ると、こちらはげんなりとうなだれてい。

「なんどよりによつて、そこだけ言うかな…」

「ちょっと鈴也、どういふことよ…まさか…」

「鈴也ほどの精氣、初めてだ」

「性器つて、あ、あ、あんた…」

「待て、何か2人のニュアンスが違つてる！」

会話の流れが怪しくなってきたので、慌てて鈴也が割つて入つた。

4 (後書き)

少しは読んでもらえてこられたなうので、
もう少し続けてみようかと思ひます。

5（前書き）

主人公が動かない…ヒロインも動かない…
あ、ヒロインって貴子のことじゃないですよ。

「話はわかったわ」

貴子はお茶を一すすりしてから、ため息とともに言った。お茶は自分で淹れた。勝手知ったる鈴也の家、といつやつだ。あえて紫炎の分は用意しなかったのだが、元よりお茶など必要としない紫炎にとつては、何の意味もないらしい。

嫌がらせが功を奏しなかったからなのか、貴子の表情は、納得とう言葉からは程遠いが、とりあえずは誤解が解けただけでもよしえよう。と、鈴也は小さく息を吐く。

「でも！」

だん、と貴子がテーブルを叩いた。気を抜きかけていた鈴也は、反射的に背筋を伸ばす。

「私は、ぜんつ、ぜん納得なんかしてないんだからね！..」

「まあ… そうだろうな」

本来、鬼を討伐する立場である伏鬼衆が、こともあらうて鬼の契約者になる。それだけでも異例中の異例であり、特に名門といわれる御堂家ではありえない。他の伏鬼衆に知られれば、笑いものになるどころではすまないだろう。

「ほんとに、どこまで御堂の名を貶めれば気が済むのよ…」

田の前にいるのが、貴子以外の御堂家の者なら、その言葉の後に「お前たち親子は」と続くところだ。だが、貴子は鈴也の両親を悪く言つたことは一度もない。あくまで彼女が攻撃的なのは鈴也相手のみ。それも、伏鬼に関わるときのみだ。

要は、才能のない自分が伏鬼に関わることで、御堂の名が汚れることを恐れているのだと、鈴也は解釈している。

「そんなに言ひうなら、俺を御堂から追放すりやいいじゃん」「鈴也はめんどくさそうにつぶやいた。

そもそも、本家を飛び出した時点で鈴也は御堂の名を捨てようとして

思っていた。もともと御堂の家に未練はないし、そのネームバリュ－に頼る気もない。適当に母方の旧姓でも名乗ればいいと考えていたのだが、何故かそれは許されなかつた。

「それは…名家には名家の体裁つてものがあるのよ。へなちょこだからつて放り出したりすれば、それはそれで家の名前に傷がつくの言い分もわからないではないが、どこか言い訳がましい。

何せ、鈴也に御堂の名を捨てさせなかつたのは、貴子自身なのだ。本家の後継者としての権限をフル活用して、居並ぶ御堂家の面々を説得（だと鈴也は聞いている。それ以上のことは知らない）した。もちろん、その理由は鈴也に伝えていない。伝えられるわけないでしょ、と思っている。

「だから！ 御堂家の次期頭首として、私はあんたを本家に連れ戻さなきやいけないの！」

まるで自分に言い聞かせるように、貴子は高らかに宣言する。その剣幕に、これまで閉じていた紫炎の切れ長の目が、すう、と細く開いた。

「な…何よ

警戒心もあらわに、貴子が身構える。睨まれただけで、体が強張るのがわかつた。

「お前…つるさい」

紫炎はそれだけ告げると、鈴也の顔を掴み、自分の方に向かた。文字通り人間離れした美貌の思わぬ接近に、鈴也も心臓の鼓動が抑えられない。

ドギマギしつつも身動きがとれない……とらない鈴也が、若干の期待を込めて紫炎の真っ赤な唇を見つめている。だが、この先に起ころる出来事を予測していたのは、鈴也だけではなかつた。

「すとーーっぁ！！」

するり、と2人の唇の間に滑り込んだのは、貴子の右の手の平だつた。鬼の拳銃に対してもインター セプトを成功させるあたり、貴子の反射神経もかなりのものだ。もっとも、その行為をなしたのは

反射神経だけではなかつたのかもしれないが。

「んむ」

紫炎の不満そうな声と共に、ぶちゅ、と貴子の手の平と手の甲に、柔らかい感触が触れる。手の平が紫炎で、手の甲が鈴也の唇だ。

「！…！」

自分でやつておいて、慌てて手を引っ込める貴子。つっすらと頬を染めながら、ぼうっと手の甲を見つめている。ちよつと残念そうな鈴也の顔は、視界に入つていないらしく。

「何をする」

「何をする、じゃないわよ…。 鈴也も何をされるがままになつてんの…？」

我に返つた貴子が叫ぶ。そんな状況でも、鈴也の唇が触れた手の甲を、そつと左手で押さえたりしているのだが、鈴也からはテープルが邪魔で見えない。

「だから言つてるじゃん、俺の力で、こいつに逆らえるわけないんだって」

鈴也のビニカあきらめきつた物の言つ方に、貴子はカチンとくる。「嘘言いなさい！」この鬼とまたキスできると思つて、鼻の下伸ばしてたのは誰よ…？」

貴子の言葉に「無実だ」といえるだけの根拠が、鈴也にはなかつた。なので、抗弁はするだけ無駄と判断する。

「ま、まあそれはそれとして、だ…」

鈴也にできるのは、話題の転換ぐらこのものだ。このままでは一向に話が進まないのも事実。といつより、元から平行線を辿つてゐるわけだが。

「俺としては、損な取引じゃないんだよなあ」

頭の後ろで手を組んで、こともなげに言う鈴也。カツと見開かれた貴子の目に怯えつつも、おずおずと言葉を続ける。

「ぶっちゃけ、俺つて貴子の言つ通りへなちょこだからさ、一人で伏鬼の仕事やるつつても、やっぱ無理があるわけよ

「そうね。だから本家に戻つて、闘わないで生きればいいじゃない」「鈴也と貴子の間で、これまで何度も繰り返されてきたやりとりだ。御堂の家にも、直接伏鬼の仕事に携わらない者がいる。アタッカーとしての適正を認められない者、あるいはその力量が伏鬼衆として未熟だと判断された者は、裏方として前線を補佐する役目に就くのが普通だ。情報収集、作戦立案、あるいは政治的な駆け引きなど、直接的に鬼と戦わなくても、できることは山ほどある。

「でも、それじゃアイツに復讐できないだろ」

さらり、と鈴也は告げた。

「忌野童子のこと…まだ諦めてないのね」

忌野童子……それは、かつて鈴也を狙つた鬼の名だつた。幼く、そして今以上に何の力も持つていなかつた鈴也を襲い、両親を殺した仇敵である。貴子は、鈴也がその鬼を追い求めて、伏鬼衆であり続けていることを知つている。だからこそ、どんなに拒まれても鈴也を本家に連れ戻す必要があるのだ。

鈴也の行動が、あまりに危ういがゆえに。

「何度も言つてるけど…私情で鬼に関わるのはやめなさい」

これまでになく真剣な聲音で、貴子が告げる。

鬼は、人間の精気を糧としている。そして人間の精気は、感情によつて大きく左右される。ちょっととした感情の動きが、鬼に強大な力を与えてしまうこともあるのだ。忌野童子に対して、鈴也の両親がそうであつたように。

「感情を昂ぶらせたて鬼と闘うこととは、悲惨な結果を生むことになるのよ」

貴子は、心から鈴也を心配しているのだろう。腕利きの伏鬼衆だった両親を倒すほどの鬼に挑んだところで、鈴也に勝ち目はない。

「だから、紫炎の力を借りるんだよ、貴子」

まっすぐに貴子の目を見つめながら、鈴也は静かな声で言った。

5（後書き）

またしてもちょっと短いですかね。
感覚がつかめてないです。

6（前書き）

回想です。短いです。

その鬼は、突然目の前に現れた。

小学校入学に備えて買つてもらったランドセルが嬉しくて、思わず背負つたまま家を飛び出した時のことだ。背中に感じるずつしりとした重みが、なんとなく大人っぽいような気がして、誇らしげに街中を歩いていた。浮かれた気分が、鈴也の足をいつもより、ほんの少し遠くまで運ばせていた。母親と一緒にいくつものスーパーの数百メートル先でしかないが、幼稚園児である鈴也の行動範囲からはずかに外れていた。

「やあ、ぼうや」

突然背後からかけられた声に振り向くと、そこに瘦せぎすの中年男がいた。うすよごれたコートを身にまとい、ぼさぼさの長髪がいかにも怪しげ。もし、鈴也が御堂家に相応しい力を備えていたなら、その男が放つ異様な鬼気に気づいたのだろう。だが、その時の鈴也には、単なる中年男にしか見えなかつた。

「こんにちは」

礼儀正しく挨拶する鈴也を見て、その鬼はにやあ…とべたついた笑みを浮かべた。うつすらと覗く歯が、まるで絵本で見たワニのようだつたのを覚えている。

「ぼうや、いい匂いだねえ…いい匂い過ぎて、胸焼けしそうだ」

鈴也には、男の言葉の意味がさっぱりわからなかつた。だが、男の口がゅつくりと、笑いをかたどつたまま、耳まで裂けていくのを見て、やつと理解したのだ。目の前にいるのが、人間ではないことに。

がぱあ、と開いた口が、鈴也に近づいた。むせ返るような悪臭が、男の口内から漂ってきた。
(にげなきや…たべられる…)

頭で理解していても、足が動かなかつた。両親によつて徹底的に鬼から遠ざけられていた鈴也は、鬼を見るのも鬼気に当たられるのも初めての経験だつたのだ。

「鈴也あつ！！」

声の主が誰なのかを確認するより早く、ランドセルが、物凄い勢いで引っ張られた。次の瞬間、鈴也の小さな体は母親によつて抱きすくめられていた。

「鈴也、無事かつ！？」

父の声がした。だが、母親の胸にかき抱かれている鈴也からは、その姿は見えなかつた。

「くくくくく… よつやく整つた…」

鬼の声がする。

金属を打ち合ひのような音が、何度も響く。

父の苦しげな声がする。

母のうめくような声がする。

何が起こっているのか、鈴也には一切見えなかつた。

「おかあさん、くるし…」

自分を抱く母の腕は、まるで万力のように固く、びくともしなかつた。

びしゃり。

鈴也の頭に水を掛けられたような感触が伝わつた。それが額を伝い、地面にぽたぽたと落ちたとき、鈴也は息を呑んだ。その水が、真っ赤だつたからだ。

どさり、と、自分の体が母親ごと地面に倒れこんだ。ぴくりとも動かない母親の脇腹ごしに、さつきの中年男が立つてゐるのが見えた。にい…と、耳まで裂けた口が笑つていた。

「ぼうやあ… やあつと食べごろの臭いになつてきたねえ…」

父親が、中年男の腕に力なくぶら下がつていた。

「おとうせ…おか…や…」

かされるような声が、自分の喉からもれた。

「ん…いいねえ…絶望に彩られ、生きる気力を失った子供の精気は。我ながら悪食だとは思つが…やめられないねえ…」

鈴也の耳には、その声がどこか遠く聞こえていた。何が起こつているのか、まったくわからなかつた。

「おいで、ぼうやあ…」

男は鈴也の体を、母親の腕から引き剥がそうとしていた。鈴也は抵抗することも忘れ、ずるずると母親の体の下から引きずり出された。

母親の背中には、拳大の穴が開いていた。無造作に放り出された父親は、首が千切れかけていた。それでも鈴也には、両親に何が起つたのかを理解できなかつた。

男に引きずられたまま、鈴也はぼんやりと動かなくなつた両親を見ていた。遠くから駆け寄つてくる、和服姿の一団にも全く目を向けず。

男と和服姿の一団が争い始め、自分自身が地面に放り出されても、鈴也はじつと両親を見ていた。

それから和服姿の一団によつて、御堂の本家に連れて行かれるまでの間のことを、鈴也は一切覚えていなかつた。

鈴也を襲つた鬼の名が『忌野童子』だと知つたのは、それから5年後のことだつた。

7（前書き）

ちょっとでも読んでくれる人がいると嬉しいです。

リビングルームを、静寂が包み込む。ひく…と、自分の喉がなるのを貴子は感じた。怒り、不安、焦燥…様々な感情が、自分の肉体を思うように動かしてくれない。

「両親の仇を討つのに、仇である鬼を利用しようっていうの?」

貴子は鋭い目つきで、正面から鈴也を見据えた。射すくめるような視線にも、だが鈴也の態度は揺るがなかつた。

先ほどから鈴也に背中を預け、暇そうにしている紫炎も、貴子の言葉になんら反応を示さない。

「他に誰か、俺に力を貸してくれる人がいるのか?」

両親を失つた鈴也を引き取つたのは御堂本家だが、彼らにできたのは忌野童子を現場から追い払うことだけだつた。彼の鬼の行方を追つたわけでも、追撃をかけたわけでもない。

御堂本家が何をしてくれるというんだ。そう鈴也は言外に告げている。

「それは……」

本家の鈴也の扱いを考えれば、貴子が鈴也に返せる言葉はない。引き取られた鈴也に対する本家の態度は、徹底した『無視』だつた。御堂の家に鈴也などという少年はおらず、忌野童子などという鬼に殺された夫婦もいないものとして扱われた。鈴也は屋敷の離れに放り込まれ、半ば軟禁に近い状態で、14歳までの時を過ごしたのだ。目の前にいる貴子と、鈴也の身の回りの世話をしてくれた、ただ一人の使用人を除いては、彼に一瞥さえくれるものはいなかつた。

「いいんだ、別に今更、恨んじやしない」

鈴也の言葉には、まったく感情がこもつていなかつた。

「俺はただ…アイツを殺してやりたいだけだよ、貴子」

鈴也の悲壮な決意 それは以前から知つていた。彼の能力を考えると、自殺行為としかいえないその悲願を、貴子もできることな

ら手助けしたいと思つ。だが、御堂家の総意として「関わらない」と決定した以上、次期当主とはいえ覆す事はできない。

「まあ、簡単には死なないだろ。紫炎が守ってくれるらしきし。そうだろう？」

鈴也が、自分と背中合わせに座つてゐる美女を振り返る。

「話は終わったのか」

感情が希薄なせいでわかり辛いが、どうやら待ちかねていたらしい。紫炎はいそいそと鈴也の正面に移動し、その顔を両手でつかんで、自らの顔を近づけ……

「だから待てつつてんのよ！…」

再び貴子の手の平に阻まれた。

「む…」

「ふく、とわずかに紫炎の頬が膨らんだ。

(やべ、かわいい)

すんでのところで言葉を飲み込む鈴也。

「本当はすぐすぐ、すっつつつつつつつじへ納得いかないけど…契約のことは仕方ないわ」

すつ、と手の平を引っ込めて、ややつづむき加減に貴子は言った。

「いや、そもそも貴子の許可つて必要ないんじや…」

「とにかく！」

鈴也の反論を、ばん！ と机を叩くことで一刀両断する。

「紫炎とか言つたわね…あんた…！ 契約した以上は、ちゃんと鈴也のこと、守るんでしうね！？」

びしつ、と指を突きつける貴子。だが、紫炎はふい、とその指から顔をそらす。食事をたびたび邪魔されて、拗ねているのだろうか。「こちいちムカつく鬼ねえ…！」

「まあまあ。紫炎だつて、悪気はないんだつて…たぶん」

そもそも、悪気という概念すらないよつた氣もするが、いろいろ怖いのでとりなしておくことにする鈴也。

「あんたも！！」

今度は鈴也にびしょと指を突きつける。

「へ？ 僕？」

「この女にとつて、キ…キスなんてただの食事なんだから…！ 变な勘違いしてんじゃないわよ。わかつてんの！？」

「キスぐらい、どもらずに言えるようになれよ」

「つるせこのかつ…！ それより、わかつたの！？」

「へいへい」

「それならいいのよ。じゃあ、私は帰るから」

言いたいことだけ言つと、貴子は空になつた重箱を引っつかんだ。感情的になつても、きつちり風呂敷に包み直す几帳面さに、鈴也は思わず苦笑をもらすのだった。

鈴也の住むマンションを出たといひで、貴子は大きくため息をついた。

御堂家の者が鬼の契約者となつた。これは決して小さな出来事ではないし、両親に知れたら大変な騒ぎになるだろ。貴子がこうして時々鈴也の様子を伺うことすら、決していい顔はされていない。「鈴也」が御堂の名を汚さないか見張る」という名目で、からうじて見逃されているに過ぎないので。

(まあ、でも…)

どうやら、貴子にとつての懸案事項は、非常に業腹ではあるけれど、あの憎らしい鬼が取り除いてくれるだろ。

貴子が鈴也の伏鬼を…特に、忌野童子への復讐を思い留まらせよとする理由はただ一つ。鈴也の身を案じているからだ。

彼の両親は優れた伏鬼衆だった。その2人が、鈴也をかばいながらとはいえ、なす術もなく殺されるような相手と闘えば、鈴也は間違いなく死ぬ。彼がそれだけの技量しか備えていないことは、昔からわかっていた。元々才能に乏しい上に、ろくな修行も積ませてもらえなかつたのだから、当たり前だ。

鈴也が復讐にこだわるのも無理はないと思つ。伏鬼という忌まわしい世界を抜け、親子3人で掴んだ小さな幸せを、踏みにじられたのだ。本家に戻りさえしなければ、鈴也がいわれなき迫害を受けることもなかつただろう。

それでも、貴子は鈴也に死んでほしくなかつたのだ。鈴也にとつて本家は居心地が悪かろう。だが、自分が当主になりさえすれば、そんな空氣はなくしてみせる。

そう思つて、御堂家次期当主に選ばれるため、全てを投げ打つて修行してきたのだから。

（だから…鈴也が無事でいてくれるなら…）

それでいい。と、思おうとしたのだが…。

（あの鬼とは、いずれ決着をつけなきやいけないわね）
やっぱり、気に食わないものは気に食わないのであつた。

7（後書き）

まだお話を進んでいないのでアレですが、
ご意見、ご感想など頂けると嬉しいです。

8 (前書き)

氣の抜けたアクションシーンをお届けします。

鬼と伏鬼衆という、本来ならば決して相容れない2人が、寂れた裏通りを並んで歩いている。

鈴也はいつものジーンズとジャケット姿で、手には白木の鞘に収まつた刀を提げている。かつて父が使っていた、父の死後、御堂家に保管されていたところを、鈴也が勝手に持ち出した物だ。一方の紫炎は、闇を切り取ったかのような黒い衣をまとっているのみ。

午後11時。闘う術もなく、闇を恐れるだけの無力な人間は、家に閉じこもっている時間だ。もっとも、家のセキュリティーをどれだけ厳重にしたところで、鬼に対抗できるというわけではないが。単に人間は、「鬼に目をつけられないため」だけに閉じこまるのだ。

「いないなあ、鬼…」

ぼつり、と鈴也がつぶやいた。

仇敵である忌野童子の手がかりをつかむため、あるいはおびき寄せるため、鈴也はフリーの伏鬼衆として活動を続けている。かれこれ3年ぐらいになるが、その間に倒した鬼の数は、優秀な伏鬼衆それこそ貴子あたりが聞いたら、鼻で笑われそうな数だ。それも、大した力を持たない小物ばかり。

まず、鈴也には鬼の存在を感じする術がない。ただ闇雲に夜道を歩き、出会った鬼と闘うという、非常に効率の悪い方法をとつていい。もちろん、好きでそんな作戦を取っているわけではないが。

次に、力の強い鬼を倒すほどの技量もない。闘つてみて、敵わないな、と思つたら防御に徹し、隙をついて逃げる。そうやって、これまで生き延びてきた。

貴子が口を開くたびに、「伏鬼をやめろ」というのも、無理からぬへなちょこぶりだ。

「鈴也は無力に加えて、変だ」

紫炎が、呆れたように言葉を紡ぐ。高級な鈴でも鳴つているかの

よくな声だった。それだけに、地味に傷つく。

「言葉はもう少しオブラーートに包んでくれ。それに、異常偏食者に

言われたくないぞ」

「おぶらーと、とはなんだ？ 形のない言葉をビリヤツて包む？」

これ以上ないくらい真剣に問い合わせられ、鈴也は大きくため息をついた。万事がこの調子なのだから、意思の疎通が取れているのかも怪しいものだ。

「…それよりさあ、お前、他の鬼の気配を感じたりできないの？」
めんどくさくなつて、話題を転換。

「この付近に一人いるが」

「できるのかよ。で、どっち？」

すい…と、ほつそりした白い指を、後方に向ける紫炎。

「さつき通り過ぎた」

「早く言えよ！… 戻るぞ」

ぐだらないやりとり。それでも、一人ではできないことだ。奇妙な充足感を胸に、鈴也は紫炎の示す方向へと走った。

目的地は、古びたビルが立ち並ぶオフィス街だった。獣のような臭いが充満しており、いかに感知能力の低い鈴也とて、ここまで近づけば異常に気がついただろう。

「何だあれ…熊？」

二人の視線の先にいたのは、鈴也の言つように熊に似た鬼だった。ただ、体毛はなく全身が鱗のようなものに覆われているので、一目で熊ではないとわかる。人間より一回り大きな体躯と、鋭い爪。額からは鬼の象徴たる角が、ちょこん、と生えている。

(あれ？ そういえば、紫炎つて、角ないじゃん… つて、そんな場合じゃないか。後で聞いてみよう)

改めて、鈴也は意識を鬼に向ける。鬼はこちらに背中を向け、うずくまっている。時々頭が動くのは、恐らく何かを食べているからだろう。

「鬼つて、人間の肉、食べるんだつけ？」

その場に似つかわしくない、呑気な口調で鈴也がたずねる。

「私は食べない」

「いや、お前の話じやなくて…まあ、お前も鬼だけど…なんていうか、一般論として？」

「だから、私は食べない」

「食べる奴もいるってことか？」

こくん、と紫炎が黙つて頷いた。どうやら、その鬼の食事風景に嫌悪感を示しているらしいことが、気配でわかつた。紫炎から見れば、一心不乱にゲテモノを貪つてこようにも見えるのだらう。

「とりあえず、やってみつか」

すらり、と刀を抜き放ち、鈴也は無造作に鬼に向かつて歩いていった。

「せいつ…！」

隙だらけの鬼の背中に、上段から袈裟懸けに斬りつける。だが、見た目どおりに硬い鱗に阻まれて、ろくに傷つけることもできなかつた。

これが、鈴也が伏鬼衆としての才能がないと言われる所以である。たとえばこれが貴子なら、刃に靈力を流しこむことで、やすやすと鱗ごと鬼を切り裂いたに違いない。たとえ得物が鋸びた包丁であつたとしても、だ。

だが、鈴也の攻撃には靈力がほとんど込められていない。これは、鈴也に靈力がないというよりも、効率的な靈力の流し方がわからぬからだ。元来センスがない上に、優秀な指導者もいなかつたので、当然といえば当然だ。

じつと見ていた紫炎からすれば、刀が折れなかつたのが不思議なくらいだった。

「かつてえ…」

情けない表情で振り返る鈴也に、紫炎の口元がほんのかすかに動いた。どうやら、笑つたらしい。

「笑うなよ、こっちは一生懸命なんだぞ」

あまり一生懸命に見えない様子で、鈴也がつぶやいた。

「そんな芥のような鬼、斬らない方が難しい」

紫炎の言葉には遠慮がないが、しょげている場合でもない。さすがに鈍い下級の鬼といえども、いきなり背後から斬りつけられれば、敵の存在に気がつくというものだ。

のそり、とした動きで、体ごと鈴也の方を向く鬼。ビリヤリ、食べていたのは野良猫のようだった。

ぐるる…と黙めいたうなり声をもらし、攻撃態勢に入る。ビリヤリ、この鬼には知性のかけらも見られない。

「うーん、こいつもハズレか。とてもアイツの居場所を知つてるとは思えないな」

この鬼が忌野童子と関係あるにせよ無いにせよ、情報を聞きだすのは不可能だわつ。

「右腕」

紫炎が、ぼそりとつぶやいた。その直後、鬼の右腕がうなりをあげて、鈴也に向かつて振り下ろされる。

「おつと」

鈴也は軽く身をひねると、鬼の攻撃を紙一重でかわしてみせる。

「つおー、当たつたらただじゃ済まねえな」

「左腕」

紫炎の宣言どおり、今度は左腕が横殴りに振られた。その攻撃も、鈴也は体を“く”の字に曲げることで、軽々と避ける。

「よく避ける……右腕」

鬼の攻撃を“こと”とく予想し、鈴也に告げている紫炎。だが、その助言も必要ないほどに、鈴也の体捌きは巧みだった。

何を隠そう、鈴也が他の伏鬼衆に勝っているのは、「避ける」とだけなのだ。鬼に対する攻撃も防御も、靈力を使いこなす技量もつと言えば、天性の才能と、適切な指導の下でのたゆまぬ努力が

不可欠だ。だが、その全てを鈴也は「えられなかつた。だが、避けるだけならば、一人でも訓練できた。動体視力と反射神経、あとは体を鍛えればよかつた。御堂の離れにいた数年間、それだけをただ鍛錬し続けた結果、鈴也は人並み外れた「回避能力」だけを身に付けることができたのだ。

「があああああああっ！！！！！」

ひょいひょいと自分の攻撃をかわし続ける鈴也に苛立つたのか、鬼が咆哮をあげた。

「隙あり……てい」

咆哮を終え、鬼の顔が再び鈴也の方を向いた刹那。無造作に突き出した鈴也の刀が、鬼の右の眼球を貫いていた。

「ぐあうっ！－！」

「おおつと、あぶね」

激痛のあまり、鬼が振り回した腕を、飛び退つて避ける鈴也。が、その手に刀は握られていなかつた。唯一の得物が、鬼の目に突き刺さつたままだつたのだ。

「ありや……しまつた。どうしようかな…」

「鈴也…どいてくれ」

黙つて見守つていた紫炎が、すい、と進み出た。

「永らく生きてきたが、これほど苛立つ戦いは初めて見た」

鈴也のあまりにちまちました鬪い方は、感情の希薄な紫炎をして、苛立たしめたようだ。業を煮やしたように鈴也を押しのけ、鬼の前に立つ。

「ぐるるう…」

鬼の方は、新たな敵の出現に警戒しているのか、それとも紫炎のただならぬ鬼気を感じ、萎縮しているのか。低いうなり声を上げたきり、動こうとしない。

「散れ」

紫炎の手が、引っかくような形で鬼の体をなでる。

「うわっ！－！」

驚いたのは鈴也だ。紫炎が軽くなっただけに見えたのに、それだけ鬼の体は無数の肉片と化し、バラバラになつて崩れ落ちたのだ。

「南 水鳥拳みたいだな」

鈴也は、子供の頃に読んだ漫画を思い出し、素直に感嘆するのだった。

8（後書き）

主人公の無能振りが、私自身の予想を上回り始めました。
いや、予想じゃなくて、予定を。

9 (前書き)

短いですが、ちょっとキリのいいところで
上げておきます。

よかつたら感想ください。

「すまんね」

肉片となつた鬼の頭部から刀を引き抜きながら、鈴也が告げる。
それに対する紫炎の返答は、きょとん、とした鈴也お気に入りの表情。鈴也の言葉の意味するところが、理解できなかつたのだろう。「お前が俺と結んだ契約は、俺を守ることだけだ。なのに結果的に、お前に同族殺しをさせることになつちましたからさ」「ひらひら、と紫炎の細い眉根が寄つた。ほんのわずかに。

「なんで怒るんだよ……？」

「心外だ。私はあんな芥と同族ではない」

「何かよくわからんが、鬼にもいろいろあるんだな」「さあ、と、さらに深く紫炎の眉間にしわがよつた。

「名譽を傷つけられた。謝罪を要求する」

「そんなにか！？ わかつたよ、どうすりやいいんだ？」

「代価を支払うのが妥当」

がしつゝと紫炎の手が、鈴也の頸を掴む。

「ちよつ…おま…ほんとは怒つてないだろ！？ ただ精氣が欲しいだけじゃねえか！！」

「正当な代価」

ぐご、と引き寄せられた鈴也は、そのまま紫炎に唇を奪われた。厳密に言うと、唇を介して精氣を、だが。

「…………ふ…………」

ようやく離れていつた紫炎の唇から、かすかな吐息が漏れる。たとえようもなく妖艶ではあるが、正直その光景を楽しむ余裕など、鈴也には残されていない。

「うう…………吸いすぎだ、馬鹿…………」

かすむ視界の中で、につ、と紫炎が笑つたよつて見えたが、鈴也は氣のせいだと思つことにした。

「あと……よろしく……」

意識が途切れる寸前の鈴也にできたのは、それを紫炎に伝えることだけだった。

「起きたか」

鈴也が目を開けると同時に、紫炎から声をかけられた。

「おお……既視観満点の挨拶、ご苦労さん」

そういえば初めて紫炎に精氣を吸われた時も、こんな展開だつたなーと、鈴也はぼんやりと思い出していた。といつても、一昨日のことだが。紫炎によつて精氣を吸われ、意識を失つた鈴也は、今と同じように自宅のベッドに寝かされていたのだ。

「もう朝か……結局、一晩中眠つちまつたんだな、俺……」

「いや」

紫炎が小さく首を振る。

「ん？ まさか24時間以上寝てたのか？」

「いや。鈴也は夜中に一度、目を覚ました」

「え、マジか？」

と、言われても、鈴也にはまるで覚えがない。

「“まじ”とは何だ？」

「それはいいから。んで、またすぐ寝ちまつたんだっけ？」

「こくん、とうなづく紫炎。

「起きたところで食事をしたら、また寝てしまった」

「え？ 飯なんか食つたつけ、俺？」

ふるふる、と今度は首を横に振る紫炎。

「食べたのは私」

「お前かよ！ ……また吸つたのかよ！ ……俺を殺す気か！？」

思いのほか旺盛な紫炎の食欲に對して、さすがに身の危険を感じる。

「人は精氣を吸いすぎると死ぬ……のか？」

「いや、聞かれても困るんだけど……死ぬんじゃね？」

鈴也の答えは、あくまで推測である。鬼についても伏鬼についても、極端な勉強不足である鈴也には、わからないことがあまりに多い。

ただ、今の勢いで精氣を吸われ続けると、恐らくは近いうちに限界が来る、という予感はあった。限界の先にあるのが、死なのか生殖不能になるのかは、わからないが。

とりあえず、詳しい事は今度、貴子に聞いてみよう、と決めた。

9 (後書き)

現状、書いてあるところまで公開します。

一応、この先もプロットはできていますが
間が埋まってないので、ちょい更新に時間がかかるかもしれません。
よろしく。

10 (前書き)

少し短いですが続きです

鈴也と紫炎が、『契約』とこう名の同棲生活を始めて3日目の朝。その間に、訪ねてきた貴子と紫炎の間で諍いが起ること3回（つまり1日1回以上）、紫炎がつっかり加減を間違えて精気を吸いすぎ、鈴也が氣絶すること2回（つまり毎日）。

テレビに興味を持った紫炎が、ボタンを押そうとしてリモコンを握りつぶしてしまつこと1回。デリバリーピザの配達員が、おもむろにドアを開けた紫炎の美貌に固まってしまい、ピザが冷める1こと1回（配達員は何故か、お金も受け取らずに帰つていた）。トリブル続きではあるものの、それらはどれも鈴也の予想を大きく上回るほどのことは起らなかつた。そう、3日目の朝を迎えるまでは。

「 はあ？」

「こつものよつ」起きたが、鈴也」という呼びかけを受けて、ベッド脇にいる紫炎に寝ぼけ眼を向けた鈴也は、そこに存在していたものを見て間の抜けた声を上げる。

べたり、と崩した正座で座り込んでいるのは、間違いなく紫炎だ。いつものように無表情に、赤い瞳で鈴也を見つめている。だが、その格好がいつも通りではなかつた。

彼女が見に着けているのは、いつだつたか、貴子が夕飯を作りに来たときに持つてきて、強引に置いていった白いエプロン。そしてその下は 全裸だつた。

「わあっ！――な、なにやつてんだおまえ！？」

エプロンよりなお白い肌は、思わず喉がなるほど艶かしく、いつもの黒衣ではわかりづらかつた胸のふくらみや腰の曲線までがはつきりと見て取れる。健康な青少年である鈴也には、あまりにも刺激の強い姿であった。

「作戦は成功」

紫炎は、希薄ながらはつきりと、満足そうに頷いた。

「な……なんだよ作戦つて……つて、お前その本……！？」

裸エプロンとこう凶器の前に気づくのが遅れたが、紫炎の手には一冊の雑誌が握られている。たまに訪れる貴子の目を逃れるために、押入れの天袋の奥にしまつておいたはずの、鈴也秘蔵の一冊だった。

「人のエロ本、漁つてんじゃねえよ！　返せ！！」

今すぐにベッドに穴を掘つて入りたい気持ちを何とか抑え込み、鈴也は逆ギレでその場をしのごうとするが、目の前の鬼はそんな作戦が通用する相手ではなかつた。

「大事な研究資料だ、まだ渡すわけにはいかん」

平然と言い返されても、鈴也としても轟沈するほかない。そもそも、今の紫炎の格好は鈴也の超弩級ストライクなのだ。強く出られるはずもない。

「なんの研究だ、なんの！？」

「愚問だ。鈴也を欲情させるための研究に決まっている」

「バカ野郎、欲情云々の前に、刺激が強すぎるわ！！」

「いいから、早く」

問答無用で、唇を突き出してくる紫炎。せっかく研究と準備を重ねて、鈴也を自分で欲情させることができた 食材を美味しく調理した、というべきか のだから、味が劣化しないうちにじい馳走になろう、という魂胆だ。

いざれにせよ、超絶美女がどストライクの格好で唇を突き出しているのだ。そんな状況を見逃せるような男がいようはずもない。鈴也は苛立ち半分、喜び半分の複雑な気分ながら、紫炎と唇を重ねるのだった。

だが、鈴也の予想に反して、精氣を吸われている時間は短かつた。

「……ん？　どうした？」

すつ……と離れていく唇を、少しだけ名残惜しく思いながら、鈴也は訊ねる。朝から気絶するほど吸われても困るが、今のはずいぶん

と軽い食事だったのではないだろうか。

「吸いすぎると危険……なら、質を高めればいい」

「そういえば先日、「精氣を一気に吸いすぎるな」と紫炎に注意したのだった。『ひやうやら』の鬼は、鈴也を自ら欲情させることで精氣の質を高め、効率よく攝取する方法を思いついたようだ。そのためには鈴也が欲情しやすい状況を把握する必要があり、その資料として、隠していた秘蔵本が必要だった、ということだ。

「アホみたいな作戦だが……乗ってしまった以上は文句も言えないな……それにしても、どうやって見つけやがったんだ」

「あんなに念入りに隠しておいたのに……とは、鈴也の心の声である。

「『契約者』の思考を読むぐらい、造作もない」

そう言われて、初めて紫炎と出会った晩のことを思い出す。意識を失った鈴也を、彼女はこの家まで連れ帰っているのだ。行つたこともない家がわかるくらいなのだから、秘蔵本の隠し場所がわかつてもおかしくはない……。ような気がしないでもない。

「いやいや、ちょっと待て」

「？」

「だつたら何も、工口本を引っ張り出してくる」とないだろ？ 直接、俺の頭から

情報を読みばよかつたんじゃねえか

「……あ」

紫炎も、自分がずいぶんと回りくどいことをしていたことに、遅まきながら気がついたようだった。

「なんだよ、工口本は暴き出されるわ、自分の性的嗜好はさらされるわ、どんな羞恥プレイだよ朝っぱらから……」

げんなりと頭を垂れる鈴也。だがその反面、紫炎が自分の健康を気遣つていることに、喜びを感じる、思春期真っ盛りの青少年であった。

そのビルの周囲は、真つ黒な瘴気に漬んでいた。

ある一点を中心に禍々しい気配が渦巻き、建物の外にまで漏れ出している。

ビルの扉は取り外され、窓ガラスも大半が割れ落ちているので、その瘴気をさえぎるのはひび割れたコンクリートの壁ぐらいの物だ。瓦礫が乱れるフロアの中心に、男は静かに座っていた。ボロボロになつたオフィス用の椅子に、力なくもたれかかるような姿勢だつた。

「まつたく…困つたもんだねえ…」

粘ついた声が、その口元からこぼれ出る。

「せつかく…食いこりになつてきたと思つたのに…」

その様子を誰かが見ていたなら、男が人間でない事にすぐ気がついたろう。薄く開いた男の口には、鋭い牙がびっしりと並んでいた。

「何だかおかしなヤツがくつついてやがる…一緒に食つちまつてもいいんだがねえ…」

べろり、と異様に長い舌が、口の周りを舐め回した。

「放つておいて、味が悪くなつちや元も子もないしねえ…」

ぎつ。

椅子が嫌な音をたててきしむ。男がゆっくりと立ち上がつたのだ。「今之内に、ひつべがしちまうか…その方が、もつと美味しくなるだろうしねえ…」

男はゆっくりと歩き出す。不思議な事に、足音は一切しない。

「待つてなよ、御堂のぼうやあ……」

男は音も無くビルを出て、そのまま闇の中に消えて行つた。

10 (後書き)

「ご意見くださいた方、読んで下っている方
いつもありがとうございます」といいます

1.1（前書き）

少し難産気味で、更新が遅れています。
もし続きを待つてくださっている方がいたら、
申し訳ありません

「さて、それじゃあ今夜も張り切つていきますか…」

まるで張り切つていらない口調で、鈴也が紫炎に告げた。

いつものジーンズにジャケット、無造作に刀をひっつかみ、散歩にでも出かけるような様子だが、目的はもちろん散歩ではない。命を危険にさらす 仕事である。

厳密に言えば、仕事ではない。なぜなら、鈴也は伏鬼による収入をほぼ得ていないからだ。ただ両親の仇である鬼を探し歩き、見つけた鬼を倒す…依頼人のいない伏鬼の仕事に、報酬はない。わずかばかりの賃金が、定期的に御堂本家から振り込まれるのみだ。

それ以外は、両親の残してくれたお金を食いつぶしながら生きている。つまり、張り切つたところであまり意味はないという事になる。

「何となく鬼がいそうなところを、探つてくれると助かるんだが?」
ちらり、と紫炎に目を向ける。

「……いやな匂いがする」

紫炎は、ベランダ方面に目を向け、わずかに鼻を引くつかせると、いまいましげに眉をひそめた。

「いやな匂い? 鬼じゃなくてか?」

紫炎にしてはハッキリしない物言いに、鈴也が首をかしげていると、玄関からインター ホンの音が響く。

「誰だよ、こんな時間に……って、貴子! ?」

玄関の前で憮然とした表情を浮かべるのは、巫女装束に身を包んだ御堂貴子であった。

力ギを開けると、ドアを引っ張がすかのような勢いで室内に入つてくる。

「やつぱり…これから出かけるところだつたよつね…」

「いや、まあそうだけど…いつもの事ながら、止めてムダだぞ?」

いくら紫炎と契約して、危険が減ったとはいえ、貴子は鈴也が伏鬼の仕事を続けることは反対している。仕事は自分がやるから、鈴也はおとなしくしている、とでも言つにきたのだろうと鈴也は思つた。

「別に止めに来たわけじゃないわ。今日は、私があんた達に同行するのよ」

貴子の言葉は、鈴也の予想に反するものだった。

「はあ！？ 何でだよ？」

「い…いいでしょ！ あの鬼の力がどんなものか、確認したいだけよ…」

「そんなもん、初日に思い知つてるじゃねえか…」

鈴也達が紫炎と初めて会つた晩。貴子は紫炎の真っ向から挑み、苦もなく文字通り片手で捻られている。

「う…うるさいわね…あの鬼が暴走したりしないか、監視するのよ…」

「何か口口理由が変わつてる気がするが…まあいいか。おーい、

紫炎…」

玄関先で論争していても始まらない。鈴也は紫炎を呼び、出発しよつとする。

「紫炎…何やつてんだ、お前？」

紫炎は、リビングからひょこり、と顔を出して鈴也と貴子のやりとりを見ていた。なぜか、その形のよい鼻をつまんだままで。

「いやな匂いの元がいる」

「いやな匂い？ ああ…ちつき言つてたな。何だつたんだ、結局？」

紫炎の白い指が、ぴつ、と貴子をさした。

「その雌の匂い」

その言葉を聞いた瞬間、貴子の顔が真っ赤に染まる。

「ちょっとあんた！ 鈴也の前で何て事言つのよ！」

「いや…俺の前とかそういう問題じやないと思つんだが…」

「だつて、ありえないでしょ！ 私は伏鬼の前には必ずお風呂で

略式の禊をしてゐし、香だつて炊いてゐわ。変な匂いなんてするわけないぢやない！」

貴子が真つ赤なのは怒りなのか、羞恥なのか。恐らく前者だと鈴也は思つた。それにしては、貴子の目にわずかな涙が滲んでいるような気がしたが。

「嘘だと思うなら、嗅いでみればいいぢやない！　ほら！」

「待て待て貴子、勢いでおかしな事言つてるぞ！」

ぐいぐいと身を押し付けてくる貴子から、鈴也はのけぞるつうように身を遠ざける。

「な、何で逃げるのよ、まさか鈴也まで……」

「いや、だからわしじゃなくて……」

誤解を解こうにも、うまい言葉が浮かばない。

もちろん、鈴也が逃げたのは貴子が臭いからではない。先日の一件で、貴子が巫女装束の下にブラジャーを着けないと知つてしまつた鈴也にとって、この密着は危険きわまりないのだ。さうこそ、下手に欲情すると一発で紫炎にばれる。

(うう…なんかいい匂いがする…)

「鈴也」

いつの間にか、紫炎は鈴也の背後まで歩み寄つていた。

「な、なんだよ……」

「わざかだが、精氣の質が上がつている」

やつぱばれてる。鈴也の額を冷や汗が流れ落ちた。

「ひへ…すればいいのか」

むぎゅ、と背後から紫炎が抱きつこつくる。前からは貴子がぐいぐいと。

「ちょっとあんた、何やつてるのよ…？」

「お前が鈴也を欲情させられるなら、私にできないはずがない」

紫炎は眉間にしわを一本刻んだ表情のまま、貴子同様にぐいぐい体を押し付けてくる。前後から柔らかいものに挟まれて、幸せなやら不幸なやら、もはや鈴也自身にも判断がつかない。

「なあ…頼むから、早く出かけようぜ…」

いろいろと限界を迎えてつあった鈴也は、それだけを切り出すのが精一杯だった。

(疲れた……)

出がけの騒動を思い出し、鈴也は大きくため息をつく。

家を出てからも貴子からは「どう? 私…臭くないよね?」とか、紫炎からは「せっかく質が上がったのに、なぜ吸わせてくれない」などと問い合わせられた。

「貴子は臭くないし、いい匂いだ。紫炎、精気は仕事が終わってからな」

そう言つて何とか2人をなだめすかし、夜の街に出てきたのだ。それ以降、なぜだか貴子は機嫌がすこぶる良くなり、紫炎は無表情。どことなく、撫然とした雰囲気さえ感じられるが、鈴也は気にしないことにした。

「…で、鈴也。一応聞くだけ聞いておくけど、何かあてはあるの?」貴子の疑問はもつともだ。だが、今更もある。これまで鈴也の伏鬼活動に、あてがあつた事など一度も無いのだ。

「いや、特にない。鬼の気配なら、紫炎が感知できるけど…特定の相手となるとな」

「そうね…私もある程度の感知ができるけど…」

紫炎に張り合つよつに言つてはみたものの、貴子には忌野童子の気配を探る事はできない。なぜなら、彼女は忌野童子に会つた事がないからだ。

「今のところ、この近くに鬼の気配は感じないわね

「へえ…やっぱ貴子ってすげえな」

「そ、そりでもないわよ…ちゃんと修行すれば、鈴也だってできるようになるわ」

実力が認められたのが嬉しいのか、貴子がやや頬を赤らめる。

「それに、上級の鬼は気配を人間に紛れさせてるから……こんな大雑把な感知じや、大物は見つけられないかもしれないし……」

一口に鬼といつても、いろいろな鬼がいる。知性のない獣のような鬼、知性も理性も併せ持ち、人間と共存しようとする鬼。そして人間社会に紛れ込み、背後から人を襲う狡猾な鬼。最も危険度が高いのが、人間に紛れている鬼だといえる。探し出すのが困難な上に、そういうた鬼は力も強いケースが多いのだ。

そして鈴也の探す忌野童子は、間違いなく危険な鬼だ。約10年もの間、数々の伏鬼衆の目から逃れ、あるいは退け続けているのだから。

「まあ、いつも通りブラつくしか……ん？」

気がつくと、紫炎が鈴也のジャケットの袖をつんつんと引っ張つていた。

「なんだ、どうかしたのか？」

「私の方がすごい」

「は？ 何が？」

「鬼の気配を探るのは、私の方がすごい。この雌よりも」「どうやら、紫炎は鈴也が貴子をほめた事が気に入らないらしい。「あ、ああ……そうか……うん、そつかもな……えーと……」「（何なんだよこの流れは、もういい加減にしてくれよ……めんどくせえな……）

そんな心の声を押し隠し、事態の収束を試みる鈴也。

「す……いな、紫炎」

そう言いながら、真っ白な髪をぐりぐりと撫でる。

「……ふつ」

撫でられながら、紫炎がちらり、と貴子を見た。口元が、ほんのわざに笑いに彩られている。貴子には、それが優越感によるものだと直感できた。

「いひ、いの……わ、私も……じゃなくてつ……」

自分も撫でる、と言うには、貴子はややプライドが高すぎた。

「あんた！いい加減に『この雌』呼ばわつは止めなやこよー。」
そう怒鳴るのが精一杯だった。

そんな時だった。

『やあ、久しぶりだねえ……ほりやあ……』

貴子と紫炎の声の隙間を縫いつめにして、そんな声が響いてきた

のは。

1.1 (後書き)

そろそろ話題を動かさないと…

その鬼は、かつて鈴也が見た時と同じ姿をしていた。しわだらけでヨレヨレの、薄汚れたベージュのトレンチコートも、血色の悪いやせぎすの体も、ボサボサの髪も。そして、口内にびっしり並んだギザギザの牙も。

「つ……」

忌野童子 鈴也が捜し求めてきた両親の仇。

「な……なんなの、こいつ……」

伏鬼において、鈴也の遙か上をいくはずの貴子さえ、思わず息を呑むほどの、不気味な鬼氣が辺りを埋め尽くしていた。

「あいかわらず……極上の気だなあ……へひひひ……」

にたあ……と笑う不気味な表情を見た瞬間、鈴也の体から力が抜けそうになる。必死の思いで手に力を込め、刀を取り落とす事だけはまぬがれた。

「う……ああ……」

怒りと恐怖が、鈴也の胸中でせめぎ合っていた。

目の前に、憎い仇がいる。

鈴也から両親を奪い、御堂の家に閉じ込める原因となつた存在。

鈴也が幼い頃から孤独を味わい、周りの人間に對して絶望を抱くようになつたのは、この鬼のせいだと思って生きてきた。この鬼を倒せば、自分の中の劣等感が捨てられる。そして御堂の家に對する意地も、貴子に対するわだかまりも消え、御堂本家も自分の力を認められるはず。それだけを求め、探し続けた鬼だ。

だが、鈴也の足は動かなかつた。指一本すら、自由には動かない。右手に握つた刀が、まるで鉄の塊のように重い。

相手は鬼だ。自分よりはるかに能力の高かつた両親でさえ、なすべなく殺された。怒りと恐怖に捕われた今の鈴也が、叶う相手ではない。

「ほつほつ、ずいぶんとしなびた精気になつたものだ……」

鬼が、ほくそ笑むように言つた。神経を逆なでするような、甲高い声で。

「待つてたんだよお、坊やの精気がそんな風に、腐つていいくのをさああ……」

「……」

くくく……といつ細い笑い声が、鬼の喉からこぼれた。言葉も出ない鈴也に対し、まるで、笑いをこらえようとして、失敗しているかのようだ。

「どうにも俺の味覚は変わつていてなあ……他の鬼が涎をたらすような、極上の精氣は受け付けないのさあ……だからあの時は坊やの両親を殺したんだけどなあ……ひひひ」

両親を殺された絶望から、鈴也の精氣は生命力を失い、劣化するはずだった。いや、実際にしたのだろう。それを吸う直前に、忌野童子は御堂本家によつて撃退されたのだ。

「口惜しいつたらなかつたぜえ？……でも、俺は待つたんだ。再びお前に見え、その腐りきつた精氣を啜る日をなあ……」

じゅるり、といやな音がした。目の前の鬼が舌なめずりしたのだと理解するのに、しばらく時間がかかった。

「鈴也……鈴也！」

貴子が自分の肩を掴み、必死で呼んでいる。だが、その声も鈴也の耳には届かない。貴子は鈴也を後ろに下がらせ、忌野童子の前に進み出た。

「あんたが忌野童子ね……叔父様達を殺して、鈴也からすべてを奪つた……！」

「いやいやあ……ちがつよ、お嬢ちゃん……まだすべては奪つてないよお……」

粘ついたしゃべり方に、貴子は眉をしかめる。これほどまでに不快感を感じる鬼を、彼女は見た事がなかつた。

「まだ坊やの精氣は吸つてないからねえ……絶望に染まついた、腐

つた精氣をさあ……」

「あんた……本氣で最つ低な鬼ね……！」

すらり、と貴子が逆手に持った小太刀を抜き放つ。

「ああ……お嬢ちゃんの精氣もなかなかだなあ……どうすれば絶望してくれるかなあ……？」

べろり、と忌野童子が舌なめずりを見せる。

「坊やが死んだら……かなあ？」

その言葉が終わらぬうちに、貴子は駆け出していた。一瞬で忌野童子の懷に飛び込み、喉元めがけて小太刀を振るう。だが、忌野童子はその鋭い一撃を、のけぞってかわした。

「おお……怖い怖い……触れただけでも火傷しそうな法力だねえ……」

かわされたと知るや、貴子は素早く間合いを離し、身構えている。「でもねえ……坊やの精氣の方が、美味そうだなあ……お嬢ちゃんが死んだら、もつと美味くなるんだろうねえ……」

ぞくり、と貴子の背筋が粟だつた。

「坊やの周りの存在をぜんぶ殺したら、どれだけいい味になるかねえ？」

ちろり、と舌を覗かせながら、忌野童子が再び鈴也に視線を移す。鈴也の口元からは、細い血の筋が流れていた。

「ああああああああああああ……！」

鈴也の絶叫。恐怖を払拭するため、自ら唇を噛み切つた。震える全身に力を込め、刀を構える。

「くたばれえええっ……！」

鈴也が忌野童子に向かつて飛び込んでいく。タイミングも姿勢もあつたものではない、最悪の切り込みだった。元もとの実力不足に加え、感情に任せた攻撃だ。

「鈴也、無茶よ！」

がぎん、という鈍い音。肉を切つた手^レたえなどまるでない。貴子の予測どおり、鈴也の刀は、鬼の皮膚一枚たりとも傷つける事はできなかつた。

「ひはははあはは！ 非力だなあ、坊やあ！ 法力もない、技術もない、坊やにはなあ～んにもないからなあ！」

おかしくて仕方がない、と言いたげに、忌野童子は笑い出す。それは、鈴也に対する嘲笑のようでもあった。鈴也を、無力感と絶望の淵に叩き込もうとしているかのようだ。

鈴也はめちゃくちゃに刀を振り回し、忌野童子を切りつける。だが、切れるのはよれよれのトレンチコートだけで、憎き鬼は涼しい顔をして鈴也を見下ろしていた。

さあんねんでしたあり 坊やじや無理たねえ……？

いこの間はか 鎧也のでたらめな攻撃は、
の右手が、鎗也の刀をしつかり掴んでいい。

「思ひ上がつた坊やは、ちよつと癪に当りあつてもいぢり……」

忠野^{トヨノ}が入^{アリ}る。

「鈴也、離れてーー！」

貴子が呟ふか
錦也の体はせはやいに事を聞かない

「おい」

今までずっと黙っていた紫炎が、初めて声を出した。その言葉は、
忌野童子に向けられたものであるらしい。

「ああ？ なんだあお前：？」

忌野童子の問には答えず

その腕をくいと引張るが、腕力した鍔せの体力は、ほんと紫炎に抱きとめられる。

「何するんだあ、ベツピンさんよお……？」

「これは私のだ」

ぎゅ、と紫炎の眉間に深いしわが寄つてゐる。

一せいかくの味が落ちたらどうしてくれると

「へえ……あんたも鬼かあ……同じ餌を狙う、ライバルってどこかあ

？」

その言葉に、紫炎の眉間のしわがより深くなつた。

「らいばる……意味はわからないが、不快だ」

鈴也を掴んだ手と逆の手が、すつ、と忌野童子の方へ伸びた。

「おおつと！」

貴子の斬撃をかわした時より遙かに焦つた様子で、忌野童子が大きく飛び退る。

「危ないねえ……こきなり心臓を狙つてくるなんて…」

紫炎の手は、さつきまで忌野童子の心臓があつた空間にある。一撃で心臓を貫こうとしたらしい。

「私の食事を邪魔するなら……消す」

「くひひ……」いつも10年前から狙つてるんだ、諦められないねえ

黙つてにらみ合つ2人の鬼。だが、静寂を破つたのは忌野童子だった。

「まあ、今日のといひおとなしく引き下がろうか……続ければまた今度にしようよ、坊や……」

それだけ言い残すと、忌野童子は音もなく闇にまぎれて消えた。

「鈴也……大丈夫？」

貴子が、慌てて紫炎の腕の中にいる鈴也に駆け寄つた。

「…………」

かすれるような鈴也の声。

「何で俺には……力がないんだ……なんで……」

暗く淀んだ瞳で、鈴也は誰にともなくつぶやいていた

「ねえ鈴也……やつぱりやめた方がいいわ」

忌野童子が立ち去つてしまらしした頃、不意に貴子が言つた。ようやく鈴也も自分の足で歩けるようになつてはいたが、暗い表情は変わらない。紫炎は、当面の敵がいなくなつた事もあつてか、鈴也の体を解放し、その後ろに付き従つている。

「あいつは……忌野童子は、鈴也の手には負えない相手よ」

鈴也の攻撃を涼しい顔で受けていたのはともかく、貴子の必殺の一撃でさえ、軽々とかわしてみせた。あの攻撃は、仮に刃を避けても、刀身に込めた法力により少なからずダメージを与えるはずだったのだ。だが、忌野童子はその法力が及ぶ範囲まで正確に見切り、紙一重でかわした。伏鬼のエリート御堂家の次期当主である貴子をして、強敵と言わざるを得ない。

「……だから諦めろっていうのか……？」

「……だつて見たでしょ？ 鈴也の攻撃は……通用しなかつたのよ？」

貴子の言葉に、鈴也は刀の柄をぎりつゝと握りしめる。攻撃の通用しない相手を、鈴谷が倒せるはずがない。貴子はそう言つているのだ。

「あの鬼は、いづれ御堂本家が責任を持つて伏滅するわ。だから鈴也は……」

「家でおとなしく待つてろつて？」

ぎりり、と鈴也が貴子を睨みつける。この淀んだ瞳を、貴子は見つことがあつた。両親を失い、御堂本家に連れてこられた当初の鈴也は、ずっとこんな目をしていた。

「冗談じゃねえ！ これまで御堂が何をしてくれた！？ 俺を閉じ込めて、臭い物に蓋をしてきただけだろ？ がー！」

鈴也に対する処置を決定したのは、現当主である貴子の父だ。その決定に反対するだけの発言力が、当時の貴子にはなかつた。鈴也

が背負つてきた境遇に関して、貴子には何の責任もないのだ。

それでも、貴子に対する激情は留めようがなかつた。貴子の言い分は正論であり、理性では理解できる。だが、感情がそれを許さなかつた。

「ただ力がないっていうだけで俺達親子を放り出して、鬼に狙われても助けてくれやしなかつた！ 父さんや母さんが殺されたつてのに、無かつた事にされたんだ！」

「それは……」

「責任を持つて伏滅だと…？ ジャあなぜ今まで責任を果たそうとしなかつたんだ！」

鈴也は貴子の両肩を掴み、揺さぶるよつて間髪。

「御堂は面倒事から目を逸らしたんだろう！ 俺からも、父さん達の死からも、忌野童子からも… 大事な大事な、伏鬼名門の名を守るためにな！」

「鈴也… お願い、聞いて…」

「つむさい！ 御堂がやらないから、俺がやるんだ！ 貴子みたいな才能がなくとも、やらなきゃいけないんだよ！」

もはや、それはハツ当たりと言つていいい感情だつた。御堂の家に対する恨み辛みを、貴子にぶつけるのはが筋違いだといふことも、鈴也にはわかつてゐる。本当の怒りは、自分の無力さに向けられてゐるという事だ。

御堂の家を恨んでいないと言つたのも、才能ある貴子に対するゆがんだ感情も、押し隠すことができなくなつてゐた。この忌野童子との再会をきっかけに、心の堤防が決壊したかのようにあふれ出してしまつ。

「……このまま奴に挑んでも、負けは見えてるわ

努めて冷静に、貴子は言つた。鈴也の神経を逆撫でする結果になつたとしても、言わなければならぬ事だと思つたから。

「わかつてゐるや… もつき、嫌つてほどに思い知らされたからな…」

鈴也がうつむいてつぶやく。その表情は貴子からは見えないが、

鈴也の聲音には何か危険な響きが潜んでいたよつた気がした。

「もう…まつといってくれよ…俺がどうなるかと、御堂には関係ないんだろ?」

ゆつくりと、鈴也が顔を上げた。うつろな表情が張り付いている。

貴子は鈴也の本心に気がつき、大きく息を呑んだ。

「鈴也…あなたまさか…」

「それ以上言わなくていい。貴子…俺にはもう関わるな」
自分の考えを口にしようとしたところを、鈴也は制止するうように言葉をつなぐ。口をつけんだ貴子に背を向けて、ゆつくりと歩き出す鈴也。

「待つて、鈴也!」

「ひむかこ、帰れ!」

はつきりとした拒絶の言葉。貴子は、鈴也のそんな態度を初めて見た。御堂本家にいた頃でさえ、鈴也は本氣で貴子を遠ざけようとした事などなかつたのだ。

「鈴也…」

遠ざかっていく鈴也の背中。その視界が、じんわりとじんじんしていく。

もつ、鈴也には自分の声が届かないのだろうか。鈴也に刻まれた絶望は、それほどまでに深いのか。

気がつけば、ぼろぼろと涙がこぼれていた。

頑なな鈴也の心が悲しかつた。

鈴也の閉ざされた心を開けない自分が悲しかつた。

鈴也を失いたくないのに、止められない事が悲しかつた。

そして何より悲しいのが、鈴也が両親の元に行きたがっている事だつた。

立ち去つた鈴也を追つてくるのは、紫炎だけだった。貴子は、別れた場所から一步も動いていない。よほどショックだったのだろう。恐らくは、怒つているのではないと、鈴也は気がついていた。

「「」めんな、貴子……」

言わないつもりだつた事まで、感情の爆発に任せて言つてしまつた。貴子のせいではないことまで、全部彼女に押し付けてしまつた。それでも、鈴也には貴子を遠ざけなければいけない理由があつた。「俺の周りにいると…奴に狙われる…父さんや母さんみたいに…」

忌野童子の目的は、鈴也の精気を自分好みの味に変えて吸い尽くす事。そのためには、鈴也の心が絶望に突き落とされなければならぬ。鈴也の周囲にいる存在、心の拠り所となる者を殺すのが、最も手つ取り早いとあの鬼は考へてゐる。

このままそばにいれば、忌野童子は確実に貴子を狙う。それだけは避けたかった。

貴子は御堂の人間であり、御堂の考え方染まつてゐる。それで、針のむしろのような御堂家での生活において、1人の人間として自分に接してくれた、かけがえのない存在なのだから。

「今日からここで暮らせ。勝手に外に出る事は許さん」

田の前で両親を失い、放心状態だつた鈴也は、自宅から私物を持ち出す暇も無く、御堂家の伏鬼衆に連れられ、本家へとやってきた。そのまま屋敷の離れに当たる小屋に連行され、突き飛ばされるように放り込まれた。

突き飛ばしたのは、父の兄にあたる御堂家当主・御堂錦三。状況を説明されることもなく、自分がいる場所がどこかもわからないまだつた。

どうやら自分はこの家で生まれたらしいが、両親は鈴也が物心つくまえに出奔しているため、鈴谷に御堂家に関する記憶はなかつた。

「ここはどこですか…？　お父さんとお母さんは…？」

鈴也の質問に、解答代わりに返つてきたのは怒号だつた。

「黙れ！」

これまで怒鳴られた事など一度もなかつた鈴也にとつて、それは

異常なまでの威圧感を持つた声だつた。

「この際だから言つておく。我が御堂家にとつて、貴様の存在そのものが恥なのだ。鬼に遅れをとり、命を落とした貴様の両親もな。これ以上御堂家の名を汚すような事があれば、ただではすまんぞ。わかつたら、この中で大人しくしている。当主として、最低限の事はしてやる」

錦三はそれだけ言つと、鈴也に背中を向けた。そしてそのままの姿勢で告げる。

「わかつてるとと思うが、本家の敷居をまたぐ事も、本家の人に気安く話しかける事も許さん」

錦三は鈴也の返事を聞く事もなく、勢いよく障子を閉めて立ち去つていった。それはまるで、鈴也と同じ空気を吸うのも嫌だ、といわんばかりだった。

それからの鈴也の生活は、軟禁とも言えるものだつた。1人の家政婦だけがつけられ、勉強もすべて彼女から教わり、学校に通う事も許されなかつた。鈴也の存在は世間から完全に秘匿されていたのだ。

毎日同じ時間に目覚め、同じ時間に食事を取り、勉強をして、同じ時間に眠る。そんな生活が1ヶ月続いていた。

そんなある日、鈴也は離れの庭に見慣れない人物を見つけた。自分と同じくらいの歳の女の子だつた。綺麗に切りそろえられたストレートの黒髪に、巫女装束が妙に似合つている、可愛らしい女の子だつた。

本家からこの離れを訪れる者は、これまで1人もいなかつたので、不審に思つてゐると、

その子は自分を見て、につ、と笑いかけてきた。

「あなたが、鈴也？」

「…………」

鈴也は返事に窮していた。錦三に言われた言葉を忠実に守つてい

たからだ。

「返事くらいいしたらどうひへ？」

女の子は、きっと眉毛を吊り上げて口調を強めた。

「…本家の人に話しかけちゃ駄目だって言われてるから…」

「私から話しかけてるんだからいいのよ。鈴也は返事してるだけな

の」

「なにそれ…」

複雑な表情を浮かべる鈴也の前で、女の子は悪戯っぽく笑つて見

せた。

それが、鈴也と貴子の出会いだった。

14 (繪畫部)

貴子がメインヒロインみたいにならせてきました…
違ひんです…

貴子がウザ過ぎるって意見があったので、
ちょっと掘り下げてみただけなんです…

「私は御堂貴子。将来は御堂家の当主になるのよ」

初めて会った時、貴子は鈴也に向かつて胸を張つて言つた。それだけで、彼女が『御堂』という名にプライドを持つている事が見て取れたが、鈴也はそんな事にはまったく興味がなかつた。御堂家がどれほどの名家で、伏鬼衆の中でいかに力を持つてゐるかを、知らなかつたせいでもある。何より、自分や両親を『恥』だと言い切るような家を、好きになれるはずもない。

だから、毎日のように離れを訪れる貴子を、最初は少しづらわしく思つていた。彼女は何かといふと『御堂家』の話をするからだ。それでも、変わり映えのしない日々の生活において、貴子の訪問は鈴也の密かな楽しみとなつていつた。鈴也が、唯一対等に付き合える存在が、貴子だったのだ。

だが、いつの頃からか、2人の関係は対等ではなくなつていく。鈴也の記憶によると、12歳ごろだつただろうか、貴子が離れを訪れる頻度が徐々に減つていつたのだ。毎日だつたのが3日に一度になり、週に1度に、そして月に1度に。

「ねえ早紀さん。最近、貴子来ないね…」

ある雨の日、鈴也は何気なく鈴也付きの家政婦に言つた。

「そうですね…貴子様は本格的に伏鬼の修行に入られましたから…お忙しいのでしきつ

少し迷つてから、早紀は貴子が来なくなつた理由を、そう鈴也に告げた。

「ふつき？」

「特別な力を使って鬼を倒す業のことです。御堂家は伏鬼の名門で、貴子様は次期当主とも目される資質をお持ちですから…錦三様も熱心に指導していらっしゃるそうですよ」

「その力があれば、鬼を倒せるの……？」

「……素質次第では可能ですが……」

「……じゃあ、僕はだめなんだね」

鈴也は嘆息した。何かにつけて周囲から「力がない」「素質が無い」「落ちこぼれ」と言われ続けてきたのだ。今まで何の素質かわからなかつたが、これで納得がいった。

「鈴也ぼっちゃん……」

「早紀さんも、伏鬼衆なの……？」

「……もともとはそうですね。今は仕事から遠ざかっておりますが」

「そつか、早紀さんも才能があるんだね」

鈴也は早紀の方を見る事なく、窓の外を見ている。

「いいなあ、貴子は才能があつて……」

「鈴也ぼっちゃんは、伏鬼衆になりたいのですか？」

鈴也はぽんやりと降りしきる雨を見ながら、ふるふると首を振つ

た。

「別に……なりたくないよ」

「では、なぜ貴子様を羨むのですか？」

「だつて……」

空を見ていた視線を地面に落とし、鈴也が小さくつぶやく。

「才能があれば……いるない人間じゃなくなるんでしょ」

自分は伏鬼の才能が無いから、親子ともども本家を出奔せざるを得なかつた。そして、御堂家に戻ってきた自分に居場所がないのも、才能のなさゆえだ。自分に貴子のような才能があれば、こんな境遇に陥る事もなかつたし、両親も失わずに済んだかもしれない。

日陰者として後ろ指をされ続けた鈴也と、次期当主と期待される才能の持ち主である貴子。2人の距離は、その頃から自然と遠のいていった。

そして鈴也と貴子が14歳になつたある日。3ヶ月ぶりに離れを訪れた貴子は愕然とする事になる。

鈴也の姿が、御堂家から忽然と消えていたのだ。

御堂家を飛び出した鈴也は、早紀から教わったわずかばかりの知識を元に、フリーの伏鬼衆となつた。両親の仇をとるために、自分の存在意義を探すためでもあつた。他の道は、考えられなかつた。学校へも通わず生きてきた鈴也にとって、知つてゐる職業は伏鬼衆しかなかつたのだ。

実力のない、伏鬼衆としての生活には、何の希望もなかつた。ただ盲目的に、親の仇を討つ事だけを考えながら過ごしていた。何よりも、貴子と同じ空間にいるのが辛かつた。

貴子を妬み、才能のなさを恨む自分が許せなかつた。

それでも、貴子と早紀の存在は、鈴也の人生において数少ない救いだつたのだ。

（貴子を巻き込むわけにはいかない…）

忌野童子の力を見せ付けられた今、鈴也が考えられるのはそれだけだつた。

自分の部屋に戻つた鈴也は、疲弊した体を投げ出すようにベッドに横たわつた。紫炎は、音も無くその傍らに腰かける。

切れ長の目が物問いたげに、じつと鈴也の顔を見つめている。

「なんだよ…何か言いたい事でもあるのか？」

鈴也は自分でも、心がささくれ立つてゐるのを感じながら言つた。まだ、忌野童子に対する恐怖が体に染み付いてゐるようだ。

その恐怖を見透かしてゐるかのように、目の前の美しい鬼は言った。

「鈴也があの鬼に勝つのは無理だ」

言われるまでもない事だが、今の鈴也には厳しすぎる一言。

「だったらどうだつて言つんだ？」

「……困る」

「何が？」

「鈴也が死んだら、私が困る」

「食料として、だろ。いこや、吸いたいんだろ？」

「ぐり、とうなづき、紫炎が口を近づけてくる。いつもなり、少なからずドキドキする瞬間はあるのだが、今の鈴也はそれどころではなかつた。

少しひんやりとした、柔らかい唇が重なつても、鈴也の意識は別のこところにあつた。

「……？」

すぐに唇を離し、紫炎が首を傾げる。

「じりした？」

「……味が落ちていいの」

「え？」

一度顔を離し、紫炎は横たわる鈴也に覆いかぶさつてきた。

「お、おい……」

慌てる鈴也を無視するよつこ、紫炎はその豊かな胸を、ぎゅっと鈴也の胸に押し付けてくる。

「な、何やつてんだよ！？」

「……」

紫炎は黙つたまま、ぐつぐつと胸をすりつけつける。じりや、じり、鈴也の精気の質を上げようとしているらしい。

「……だめだ」

紫炎が、わずかに眉尻を下げた。残念がつてゐるようだが、鈴也としてはため息しかでない。長年の宿敵と再会し、力の差を痛感させられた直後なのだ。さすがにこの程度で欲情するほど、鈴也も単純ではない。

「悪いけど、今はそんな気分にはとてもなれなによ……」

「むう……」

鈴也の反応に不満なのか、紫炎は体を離し、腕を組む。

「気に入らないんなら、無理に吸わなくていいぞ。俺はもう寝るか

「らな

鈴也はふてくされたように枕に顔をうずめ、部屋の電気を消した。
疲れているせいか、睡魔はすぐに襲ってきた。

ややあつて、鈴也が寝息を立て始める。だが、それはとても安らかとは言えなかつた。

「う……う……」

しきりに寝返りをうづ、うなされるように声を上げ続ける鈴也。

苦しげに眉をひそめ、食こしばった歯がぎりぎりと音を立てる。

そんな鈴也を見つめる紫炎の赤い瞳が、わずかに揺らめいている。

「あ……ああ……ああ……！」

鈴也が助けを求めるように、手を伸ばしてきた。

「……？」

鈴也に何が起こっているのか、紫炎には理解できなかつた。紫炎は『契約者』として鈴也の思考を読む事ができるが、そこに渦巻く感情までは理解できなかつたのだ。

ただわかるのは、鈴也が苦しんでいる事だけ。

(嫌な気持ち…どうすればなくなる…?)

考えを巡らせていた紫炎が、ふと何かを思いついたような表情を見せた。

(鈴也が私にした事…嫌な気分が消えた…)

紫炎の白い纖手が、ゆっくりと鈴也の頭に伸びる。そのまま、ゆっくりとその髪をなで始めた。

鈴也が自分の前で貴子を褒め、何となく気分が悪かつた時、鈴也是自分の頭を撫でた。その時、何となく嫌な気分が薄れていったのを、紫炎は覚えていたのだ。

「うう……」

紫炎は、そのまま朝まで、うなされる鈴也の頭を撫で続けた。

14 (後書き)

「おれへなりすに」「持たざる者」の
心境を書くのは難しいですね…

15 (前書き)

ちょっとずつ更新です。
ご意見、ご感想等あればお願いします。

目が覚めると、頭がだいぶすつきりしている事に、鈴也は気がついた。忌野童子と再会し、さすがれ立っていた氣分がやや静まり、落ち着いているような気がする。

「嫌な夢を見ていた気がするんだけどな……」

不思議に思いながらも頭を軽く振って、意識を覚醒させる。さらに伸びをしてから、もう一度頭を枕に預ける。

「あれ……？」

枕の感触が、いつもと違っていた。ざりっとしたソバガラの感触はなく、柔らかいクツショーンのような、心地よい感触だった。

「起きたか、鈴也」

「わあっ！」

寝転んだままの鈴也の視界いっぱいに、世にも美しい顔がある。紫炎が、真上から鈴也の顔を覗き込んでいた。

「え……なんで紫炎が膝枕してるんだ……？」

柔らかいクツショーン…それは、紫炎の太ももだった。自分はずつと、ここで眠つていたようだ。いつもと感触が違うのも当然といえる。

ちなみに着ているのはいつも黒い。裸エプロンでないのが、安心するような、残念なような。もっとも、もし裸エプロンなら紫炎が精気を狙わないはずがないのだが。

「鈴也の願望だから」

「え…もしかして、思考を読んだのか？」

紫炎はこくん、とうなづいた。

「幼い鈴也が、誰かにこうされているのが見えた」「うわあ……」

幼い頃…母親してもらつた膝枕でも、夢に見ていたのだろうか。だんだん恥ずかしくなつて、鈴也は慌てて頭を起こす。

「重かつただる…」

「これで精氣の質が上がるなら、何ほどの事もない」

「お前、そればつかだよな…」

（そりやそうだよな…俺は何を期待してるんだよ…紫炎にとつて、俺は食料なんだ…貴子もそう言つてたじやないか）

自分に無償の愛を捧げてくれる存在など、もういない。そんな事は、当たり前の事だ。特殊な環境で育てられてきた鈴也が、そういうのは無理からぬ事だった。

貴子が自分に構うのは、御堂家の面子のため。紫炎が自分を守るのは、質のよい精氣を得るため。それ以上でもそれ以下でもない。そづじやないと思いたい気持ちを抑え、鈴也は大きく息を吐いた。

「鈴也」

気持ちが沈み込みそうになつたところで、紫炎が突然呼びかけてきた。

「ん…なんだ？ 精氣か？」

「今はいい」

ふるふると首を振る紫炎。

鈴也が了承しているにも関わらず、食指を動かさないとは、珍しい事もあるものだ。鈴也は首を傾げて続きの言葉を待つ。

「外出を希望する」

「へ？ 外へ行きたいのか？」

こくり、とうなづく紫炎。突然の要求に、鈴也は戸惑いを隠せない。これまで、紫炎が鈴也に大して精氣以外の要求をしてきた事はない。

「なんで急に？」

「気分転換…？」

「何で疑問系なんだ…というか、そもそもお前、何か気分を悪くする事でもあつたのか？」

「私の気分は外出したぐらいで変わらない」

再びふるふると首を振りながら、平然と紫炎が言い放つ。

「転換すべきは鈴也の気分」

「俺の…？」

「そうだ」

「何でそうなる？」

紫炎の思考には、相変わらずついていけない。鈴也は首をひねった。さらに、「契約」によつて思考が読めるのは、紫炎だけ、とうのも微妙に納得がいかないのではあるが。

「非常に由々しき問題だ」

「えーと…何が？」

「鈴也の精気の質が、昨日から明らかに低下している」

紫炎に言われ、昨日の事を思い出す。誰よりも憎い両親の仇に出会いながら、何もできなかつた絶望感。貴子にも紫炎にも、忌野童子には勝てないから諦めろ、と言われた無力感。恐らく、それが精気の質を落としているのだろう。

「だから…何だって言つんだよ…」

「……外で気分転換」

外出して、気を紛らわせようという事だらうか。紫炎にしては、まつとうな提案のように思えた。鈴也は腕を組み、しばし考え込む。「それぐらいで気分が変わるとは思えないけどな…まあ、いいか」このまま部屋で悶々としていたところで、事態が好転するわけでもない。紫炎を人目に晒し続けるのは少し気になるが、ここは紫炎の提案に乗つてみるのもいいかもしれない。

「わかつた…シャワー浴びてくるから、ちょっと待つて」

鈴也の言葉に、紫炎は黙つてつなづいた。

「…で…何をしてるんだ、紫炎」

家を出て5分ほどたつた頃、鈴也は我慢の限界を迎えて紫炎に訊ねた。

鈴也はいつものジーンズとジャケットスタイルだが、刀は持っていない。貴子辺りに見られたら、伏鬼衆としての心構えをこんこんと説かれるところだろうが… 鈴也は伏鬼に出る時以外、武器は持ち歩かない。貴子の小太刀のように、おいそれと隠せる代物ではない、という事も理由の一つだ。

「気分…転換?」

紫炎は、家を出てから今まで、ずっと鈴也の頭を撫で続けていた。「だから疑問系はやめろって。そもそも、気分転換と撫でると、何の関係があるんだよ?」「私にもよくわからない」

女性にしては長身の紫炎は、鈴也とほぼ身長が変わらない。頭を撫でながら歩いても、歩きにくそうな気配はなかつた。

「だが…撫でられると気分が落ち着く」

「……それは時と場合によりけりだろ」

「今はダメなのか?」

「ダメっていうか…そういう問題じゃない」

奇妙なやりとりを続けながら歩く2人。いつしか、人通りの多い商店街にさしかかっていた。道行く人々はみな、紫炎の異様とも言える美貌に目を奪われ、足を止めているようだが、鈴也は気にしない事にした。

「……なら」

紫炎は一回手を下ろし、鈴也の右手首を取る。

「な…何をする気だ?」

「……この」

紫炎は鈴也の手首を掴んだまま、その手を自分の胸の膨らみへと運んで行く。

「待てえつ…!」

「……?」

必死に抵抗する鈴也。きょとん、とした表情を浮かべる紫炎だが、さすがに鈴也もその表情を楽しむ余裕がなかつた。

「公衆の面前で何をする気だお前は…」

「気分転換」

「わかるように言え、わかるよ！」

「女の胸を触つて気分転換」

そう言いながらも、紫炎はぐいぐいと鈴也の手を引つ張りうとじている。

「バカかお前は！ 僕が捕まるわ…！」

「私の胸では効果がないのか？」

ないわけがない。ありすぎるほどあるだけに、鈴也は必死で抵抗しているのだ。

「そういう問題じゃねえ！ お前の言つ氣分転換つてのは、欲情の事か！？」

「……違つか？」

言い争う2人の姿は、周囲からどんな目で見られているのか。

ある者はただ紫炎の美しさに見とれ…

ある者は紫炎の胸を触ろうとしている（よつに見える）鈴也を羨み…

ある者は道端で不埒な行動に及ばんとする（よつに見える）鈴也に眉をひそめる。

「違う！ 違わないかもしけないけど…今は違うと思いたい！ あと、周囲の目が痛い！」

「…周りの人間を消せばいいのか？」

「アホか！」

今度こそ、鈴也は力いっぱい手を引いて、紫炎の手を振り払う。

「む…」

きゅ、とわずかに紫炎の眉が寄つた。恐らく、機嫌を損ねたに違いない。

「あ…いいか？ 言つとくけど、勝手に人を殺すな」

今更ではあるが、鈴也は紫炎が人間ではないという事を、改めて思い知つていた。鬼の価値観において、人間の命など大した意味を

持つていないうからこそ、「周囲の人間を消す」などという発想が出るのだろう。鈴也は鬼と人間の間にある価値観のずれを、今まで言及してこなかつた事を後悔していた。

「…それは『契約』の範囲外だが」

鈴也と紫炎の間において交わされた契約は『死なない』ように守る代わりに精気を提供する』というものだ。つまり、紫炎が鈴也の指示に従う必要性はない。

「あえて殺すほどの事もなし。良いだろう」

「本当だらうな？」

「あくまで鈴也の命を優先した上でならばな」

「……まあ、とりあえずはそれでいいよ…」

多分に諦めを含んだ声色ながら、鈴也はそう言つてうなづいた。

設定資料（前書き）

キャラクターと用語のまとめを入れときます。

一番重要なのは、名前の「読み」…ですかね。

「貴子」は「たかこ」じゃなかつたんです、実は。

ルビを入れると携帯で見たときにズれるので、入れなかつたんですけど…そして今更ですが。

ちなみに読まなくとも別に不都合はないです。

「貴子」を「たかこ」と読んだところで問題ないし、ここを読まなくともわかるように

本編を書いていくつもりではありますので…

設定資料

【人物】 御堂 鈴也

年齢：17歳 身長：175センチ 体重：64キロ

まともに術も使えず、剣術も微妙な「伏鬼衆」の一員。伏鬼衆の名門御堂家次男を父に持つも、両親ともに出奔。隠遁生活中に両親と死別している。両親の死後は御堂本家の離れで、専属の家政婦と暮らしていたが、14歳の時に本家を出奔し、以後はフリーとして活動。だが特に目立った功績はない。精気の質がケタ外れに高く、紫炎に目を付けられた拳句、意図せずに共生関係を持ちかけて『契約者』となる。

剣術は攻撃が苦手なので御堂家から落ちこぼれ扱いされているが、実は防御に関しては自己流の修行により完璧に近い。ただ、攻撃できない伏鬼衆など意味がないので、落ちこぼれであることには変わらない。

本来は感情の起伏はあまり激しくないが、無感動なのではなく溜め込むタイプなだけ。

御堂本家により存在を秘匿されていたため、小学校以降学校には通つた事がない。

紫炎

年齢：不詳 身長：172センチ 体重：測定不能
B 88cm . W 58cm . H 88cm (推定)

夜の公園で鈴也の精気に惹きつけられ、現れた『鬼』の女性。本来

ならば『鬼』の中でも飛び抜けた力を持つが、その反面、質の高い精気しか受け付けない体质。精気吸収に関しては口移し。相手を性的な興奮状態にさせると、より純度の高い精気が吸収できるが、そのための技術は持っていない。

感情の起伏が少なく、現在の所は鈴也以外の人間にはまったく興味がない。外見的には大人っぽい高校生（瑞々しい20代前半の超絶美女。髪も肌も真っ白だが瞳と唇だけ血のよう赤く、ゆつたりとした漆黒の衣装に身を包んでいる。

御堂貴子

年齢：17歳 身長：165センチ 体重：実測50キロ

B 84cm . W 55cm . H 85cm

御堂家当主・御堂錦三（鈴也の父の兄）の一人娘で、鈴也にとつては従兄妹にあたる少女。術も剣技も鈴也をはるかにしのぐ実力の持ち主で、次期当主と目されている。御堂家の指令に反して己の一存^{わがままともいえ}で鈴也を連れ戻そうとするが、現状実現の見通しは立っていない。その理由は実力のない鈴也が「御堂家」に恥をかかせないため（とされている）。

鈴也に対する執着から、彼と『契約』を果たした紫炎を目の敵にしている。

貴子が当主を目指す最大の理由は、自らが当主となり、御堂一族による鈴也への不当な扱いを改めさせるため。

御堂家を背負つて立つという気概がきつい態度をとらせているが、伏鬼と鈴也に関する事以外ではじく普通の少女。

御堂錦三

年齢：48歳 身長170センチ 体重75キロ

現在回想にのみ登場。御堂家先代当主の長男であり、現当主。伏鬼

の名門一族である御堂家を取りまとめ、その名を守る事を第一と考
えている。そのため、鬼に敗れた鈴也の両親や、伏鬼の才能を持た
ない鈴也を「恥」と言い切り、家名を守るためにその存在を徹底的
に秘匿。鈴也を離れに軟禁し、醜聞が他家に知れ渡らないように計
らつた張本人。

高い技量を持つ伏鬼衆だが、自分以上の才能を持つ貴子に英才教育
を施し、跡目を継がせようと思っている。娘の貴子がしばしば鈴也
と接触している事が悩みの種。

忌野童子
いまわのどうじ

年齢：不詳 身長：188センチ 体重：測定不能

強大な力を持ちながら、卑怯な手段を好んで使う『鬼』。10年前
(厳密には11年)、鈴也の上質の精気に目をつける。人間の絶望
感に満ちた精氣を好む、人間で言う「悪食家」であるため、鈴也の
精氣を貶めるためだけに両親を殺害した。人の心のスキにつけいる
手段を特に好む。

【用語】

「鬼」

いつからともなく、人の世の闇に潜み蠢く異形の生物。物理的な食
事は必要とせず、人の精氣を吸つて生きる事ができる。だが、一度
人間の肉の味を知つてしまつた『鬼』は、それ以後も人を襲い続け
る事もある。外見は様々で、えてして巨体と強力を誇る。

「伏鬼衆」

鬼を殺す事を生業とする人々の総称。法力(または靈力)と呼ばれる
力を駆使し、強靭な鬼に対抗する業を身に付けている。中でも御
堂一族は強力な伏鬼衆を数多く排出してきた名門であり、伏鬼衆の
世界では高い名声と信頼を集めている。

「契約」

定期的な精気の供給や、友好関係・恋愛関係といった理由から、共生契約を結んだ『鬼』と人間の関係を指す。大半の場合は需要と供給のバランスが合わず、人間が衰弱死するか鬼が弱体化、あるいは暴走するケースが多い。

より効率的に精気を吸收するために、『鬼』は契約した相手の好みや思考、性的嗜好をあるていど把握できるようになる。

多くの鬼にとって契約は「誇りを捨てる行為」として忌み嫌つており、契約を結んだ鬼に對して他の鬼は攻撃的であつたり蔑視するようになる。

設定資料（後書き）

せっかく決めておいたので、
一応のせとこいつと思つただけなんです。
ちなみに伏鬼衆の業や術に関しては
詳しい設定はありません。
そして重要な事ではないので考えませんでした。

ちよつと短めで…

2人がぶらぶらと町を歩き始めて、30分ほどもたつただろうか。気がつくと鈴也は、公園のベンチに紫炎と並んで腰かけるといつ、ちょっと変わった状況に陥っていた。

元々目的があつたわけでもないし、30分も歩けば少しは休憩しだくなる。さらに言えば、目的もなく歩き続けるなど苦痛以外の何物でもない。

少し休憩しようと、通りかかった公園のベンチに腰かけると、紫炎は黙つてその隣に腰かけたのだ。

「あのせ…」

黙つたまま座り続けるのに耐えられなくなつた鈴也はが口を開く。「何だ？」

「…なんか、異様に疲れたんだが…」

これまで言うに言えなかつた事を、よつやく鈴也は口にした。

「ただ歩いただけだが」

不思議そうに首を傾げる紫炎に、鈴也は「お前のせいだ！」と叫びたいのを必死で我慢した。

2人で歩くだけで異様に疲れた理由　それは、あまりにも紫炎が目立つからだった。

声をかけてくる者はさすがにいなかつたものの、通りすがりに紫炎の美貌を直視してしまい、呆けてしまつた男がいた。紫炎の全身から漏れ出す鬼気に気づき、泣き出す子供もいた（余談だが、それだけ敏感なら、伏鬼の素質は鈴也より上かもしけない）。さらに、向かってくる信号無視の車を紫炎が睨みつけ、運転手がハンドル操作を誤るという、一步間違えば大惨事になるような事もあつた。

出かける前までは、軽いデート気分だった鈴也も、さすがにそれどころではないと考え直すしかなかつた。

「だが…」

まじまじと、紫炎が鈴也の顔を覗きこむ。

「少し持ち直したようだ」

紫炎が言つのは、精気の質の事だらうか。

それはそつに違ひない。ここに来るまでにあつた数々の騒動の中では、忌野童子の事を考える余裕など微塵もなかつたのだ。

「そりや…何よりだつたな」

「つむ」

鈴也の氣のない言葉にうなづくと、紫炎はおもむろに鈴也の右手を掴む。思わずぎょっとする鈴也。紫炎が、掴んだ手を自分の胸の膨らみに運ぼうとしたのは、つい先ほどの事。鈴也が警戒するのも無理はない。

「ま…待て…そういうのは、家に帰つてから…」

慌てて言い募るが、紫炎は鈴也の手を握ったまま、それ以上動かそうとはしなかつた。

「違う」

紫炎は静かに言つた。

「私には鈴也の望みが見える」

「え…？」

紫炎の言わんとする事が、鈴也には理解できない。

「なぜこの行為を望むのかはわからないが」

不思議そうに、紫炎は？いだ手を見る。

「鈴也がこの手を『離されたくない』と感じているのはわかる」

「そつか…」

紫炎は、鈴也が頭の中で望んでいる事を、具体的に知る事ができる。2人が結んだ『契約』のもたらす効果によつて。しかし、紫炎は人間ではなく『鬼』。人間ではないがゆえに、人間の感情を理解する事もできないし、同調する事もできない。つまり、鈴也の本当の望みや胸の内までは、理解する事ができない。

鈴也は両親が死んで以降、誰かに何かを期待する、という行為を

止めてしまった。誰も自分を見ない、誰も自分には興味を持たない、自分に何かを望んでいる人間もない。そう思い込む事で、御堂本家の軟禁生活を乗り越えたのだ。

それは、貴子が離れに遊びに来なくなつた事で、決定的になつた。無論、貴子には貴子の事情があつた事はわかっている。だが、それ以上に思い知つたのは、貴子と自分の立場の違いだつた。

鈴也が望んだのは、伸ばした手を掴んでくれる存在であり、その手を離さないでいてくれる絆だ。御堂本家では望むべくもなかつたものであり、学校にすら通わなかつた鈴也が、これまでに手に入れる事が叶わなかつたものだつた。

紫炎はそんな鈴也の意識を、表面上でしか理解できない。だから、その望みを叶えるために彼女ができるのは、物理的に?いだ手を、離さないでいる事だけだつた。

「…これも…絆って言えるのかね…」

鈴也は苦笑いしながら、紫炎の手を握り返した。

2人が結んだ『契約』の内容によれば、紫炎が鈴也の望みを叶える必要などない。死なないよう守れば良いだけなのだから。にも関わらず、手を握ってくれる紫炎の存在が、鈴也にはありがたい。貴子と距離を置いてしまつた今となつては、なおさらの事だつた。

「ありがとな、紫炎」

「礼の言葉はいい」

「え?」

「それより…頭を撫でるがいい」

「頭つて…お前のか?」

黙つてうなづく紫炎。話の流れが理解できない鈴也だったが、とりあえずは言つとおりにしてみる事にした。
(まあ、感謝してるのは確かだしな)

鈴也は空いた手で、紫炎の白い髪を撫でた。

「む…」

「何だよ…言つとおりにしたのに、不満そうだな」

「不満ではない」

紫炎はそう言つたが、形のよい眉はわずかにひそめられてくる。

「が…満足感が予想より低い」

「何だそりや？」

「前回との違いはなんだというのか…？」

ぶつぶつとつぶやき始める紫炎。鈴也には、彼女の言つている事が1割も理解できなかつた。だが、鈴也自身の行動を通して、人間とのコミュニケーションを学ぼうとしているのだと、好意的に理解する事にした。

鈴也が異変に気づいたのは、忌野童子との邂逅から一週間ほどたつた夜だった。

隙あらば鈴也の精氣を吸おうとしていた紫炎が、妙に大人しいのだ。今までのように強引に精氣を奪おうとも、鈴也を欲情させようともしてこない。ただ、何かの拍子にかすめどるよつに唇を合わせるだけで、以前のように鈴也が身の危険を感じるような事はなくなつた。もちろん、無駄に性癖を暴かれるような事もない。

(腹減らないのかな…?)

鈴也としては好都合…といつより安心だが、気にはなる。鬼にとって精氣を吸うのは、人間で言つ食事と同義なのだ。

(ダイエット…なわけないよな)

それと同時に、紫炎があまり動かなくなつた。元々少なかつた口数はさらに減り、目を閉じてじつとしている事が多くなつたのだ。

「おい、紫炎…」

鈴也が声をかけても、紫炎は気だるげに片目を開けるだけで、特に返事をするでもない。

「お前…体の調子でも悪いのか?」

「節約」

めんべくぞうに、それだけを告げる紫炎。

鈴也から見れば、体調が悪くてまともに話せない状態にしか見えない。もつとも、顔色に関しては元が白すぎるるので、よくわからないうが。

「節約つてなんだ…? 体力を温存してることか?」

「小さなうなづき。」

「要するに…腹が減るからできるだけ動かないようにしてることだよな? だつたら…精氣を吸えればいいだろ。吸いすぎなければ問

題ないんだし」

一気に吸いすぎるな、とは言つたが、一切吸うなとは鈴也は言つていらない。日常生活に支障がない程度なら、別に構わないと思っているのだ。

「重要な事実が発覚した」

どこか、重々しい口調だった。いつになく真剣 と言つても、鈴也にしかわからない程度の違いではあるが な雰囲気に、鈴也の喉がゴクリと鳴った。

「鈴也はどうやら、精気が変質しにくらい」

「…わかりやすく言つてくれ」

戸惑いを隠せずに、鈴也が早口で言つ。

「なかなか質が上がらない」

「……」

人間の感情や状態によつて、精気の質が変化することは、鈴也でも知つていた。精気とはそもそも、生命の根源ともいえるものだ。だからこそ、生命力に直結する性的興奮状態にある時の精気こそが、最も良質で鬼が好むと言われている。そのために、被捕食者を性的に陵辱する鬼もいるぐらいなのだ。

それ以外にも、嬉しい時や楽しい時など、陽の感情が精気の質を高める。逆に、陰の感情に捕われれば精気の質は落ちる。

精気の質が陽の方向に変化しにくいということは、鈴也が感情の変化に乏しいということだ。御堂の家に引き取られてから、意識的に感情を殺してきたのだから、当然といえば当然なのかもしない。「つまり、期待外れってことか？ 今の俺の精気じや、まずくて吸えない？」

鈴也の声は、知らないうちに硬くなつていった。卑屈な考え方だとは思つたが、紫炎も特に否定はしない。

「それでも、私には鈴也が必要だ」

「まづくても食料……だもんな」

紫炎の言葉は、鈴也にとつて絶望をもたらすものでしかなかつた。

代わりが見つからない限り、彼女は他者から精気を吸うことはしない。だから、自分をキープして命をつなげようというのだろう、と鈴也は思った。

幼い頃から、自分に對して何かを求められる事のなかつた鈴也には、そういう発想しかできなかつた。

「口に呑えれば誰でもよかつた…」

鈴也はどこか、遠くを見るよつた目でつぶやいた。
(やつぱり…いや、それが当たり前だつたんだ…)

鈴也は思う。自分が必要だと言われた事で、舞い上がりてしまつたのだと。紫炎が興味を示したのは鈴也の人間性でも何でもなく、ただ精気の質が好みに合つただけなのに。

「バカだな…俺…貴子の言う通りだ」

両親以外と初めて交わしたキスは、食事のため。鈴也に執着したのも、守ってくれるのも、すべては上質の食糧として。2人で出かけた公園で、黙つて手を握つてくれたのも、精気の質を落とさないためだつたのだろう。

（それなのに、絆とか言つて…ほんとバカだ）

御堂の家では、決して味わえない感覺だつた。精気が目的だつたとはいえ、紫炎は鈴也でないと駄目だと言つた…いや、そうだと思つていた。

「精気の質が高いとか低いとか、そんなの俺は知らない…お前が鬼だつてことも、関係ないとつちました…」

「…精気の質が落ちていく…なぜだ？」

「やつぱり…それだけなんだな。お前にとつての、俺の価値は」

あえて目を向けないようにしていただけで、本当は最初からわかつっていた。それでも、誰かがそばにいる状態が嬉しくて、他愛無いやりとりが楽しくて。

だが、どうやら自分は、食糧としての価値すらなくなりかけてい るらしい。

「私が近くにいることが、精気の質を下げているのか？」

問い合わせるような気配はない。ただ、自分の知らないことをたずねているだけ、という雰囲気で、紫炎が問いかけてくる。
誰かのせいにしたいわけじゃない。でも、我慢ができない。否定する事ができない。

「……了解した」

その一言を最後に、紫炎は鈴也の前から姿を消した。

そしてリビングには、鈴也を除いて誰もいなくなつた。
貴子を遠ざけ、紫炎に去られ、鈴也は1人になつた。
(……いや、元通りになつただけだ……俺は最初から1人だった。両親が死んだ、あの日から)
自分に言い聞かせるように心の中でつぶやき、鈴也は枕元の刀を握った。

17 (後書き)

しゃありとしないに鈴也にトライトライあるでじょ、が、
わづかしおきにへだたれ。

(静かだな……)

夜道を1人歩きながら、鈴也は思った。

思えばこの1週間は、鈴也の人生においてもつとも賑やかな日々だった。紫炎がいて、貴子がいて、くだらないやりとりをして、言い争つて。

誰かと協力して伏鬼をしたのも、初めての経験だった。力のない鈴也と協力しようなどという、奇特な伏鬼衆が他にいるはずもなかつたのだ。

(ああ……そうか……)

不意に、鈴也は今、自分がおかれている状況に気がついた。

(寂しいんだ、俺……)

そういうえば、修行に明け暮れるようになつた貴子が離れに来なくなつた時に、同じような感情を抱いたような気がする。

寂しいと感じるという事は、それまでの状況が楽しかつたという事。そんな当たり前の事に、鈴也は今頃になつて気がついた。それほどまでに、鈴也は「楽しい」という状況から遠ざかっていたのだろう。

「やあ……まうや」

突然、背後から聞こえた声にも、鈴也の反応は鈍かつた。ゆつくりと振り向いた先には、憎い憎い仇であるはずの、忌野童子の姿がある。

だが、鈴也の心には、恐怖も怒りもわいてこなかつた。貴子も紫炎もない今、万一一つとして鈴也に勝ち目がないにも関わらず。

「おやおやあ？ 今日はあのべっぴんさんはいないのかい？」

鬼の言葉に鈴也の奥歯が、きり、と音をたてる。忌野童子の持つて回つたような言い方が、妙に勘に障つた。

「つるせえな…関係ねえだろ」

「けひひひひ！　ずいぶんやがぐれたもんだあ…　いい感じに腐つて
きてるねえ…」

陰の感情に包まれた今の鈴也の精氣なび、この鬼にとつては大好
物に違いない。だが、そんなことも、もはや鈴也にみじりでもよか
つた。

「でもなあ…まだもうちょっと、上があると思つんだよお…」

忌野童子の汚らしい笑顔が、ついに壁にぬがんだ。

「どういう事だ…」

「両親を失い…不当な扱いを受け…幼なじみとの実力と立場の違い
を見せ付けられ…」

忌野童子は指を折りながら、鈴也のこれまでの境遇を数えていく。
憎じ仇には遠く及ばず…幼なじみを遠ざけ…頬みの綱にも去られ

…

「寂しいねえ…やつと必要としてくれる人が現れたと思つたら、た
だの餌だつたんだから」
鈴也の傷をあえて抉るような、なぶるような口調。

「つるせえな…どうだつていいんだよ、そんな事」

「つれないねえ…せつかく坊やに、お土産を持つてきたのに…」

「お土産だと？」

「そうだよお…喜んでくれるといいんだけどねえ…」

その時初めて、鈴也は忌野童子のトレーナーが、以前より膨
らんでいる事に気がついた。何か、大きな荷物をコートの中に隠し
てこようとしている。

「あ…まさかでめえ…」

「はー、どうぞお…」

トレーナーが開いた。

「お土産だよーー！」

じゅり、と地面に落ちたのは。

「貴子ええええつーーー！」

巫女装束に身を包んだ、鈴也の従兄妹だった。

「けひひひひひ！　いゝい顔だあ…坊やは最高だねえ…」

忌野童子の声など聞こえないかのように、鈴也は貴子に駆け寄つた。ぐつたりとした体を抱き上げる。

巫女装束は土埃にまみれているものの、外傷はない。ただ、顔色だけが異様に青ざめていた。

「てめえ…貴子に何を…」

「けひやひやひや！　だ〜いじょうぶ、殺しちゃいないよお？　ただ、ギリギリまで精気を吸つてやつただけさあ…なかなかだつたよお、坊やに捨てられた絶望で、綺麗だつた精気が俺好みに濁んじやつてさあ…」

鈴也の顔から、血の気が引いて行く。

「健気だよねえ…『あんたがいるから、鈴也がいつまでも幸せになれないの！』なんつって、必死で挑んできてさあ…」

貴子は鈴也と別れた後、強敵である事をわかつた上で、自分から忌野童子に戦いを挑んだ。八つ当たりともいえる感情をぶつけた、鈴也のために。鈴也のことになると感情を抑えきれない貴子の心は、怒りに満ち溢れていたに違いない。

『感情を昂ぶらせて鬼と闘うことは、悲惨な結果を生むことになるのよ』

そんな、貴子の言葉を思い出す。

「おまえ…何やってんだよ…」

「おまえならないために、貴子を遠ざけたところだ。」

「なんで…俺なんかのために…」

「いひひひひ！ 坊やに一つ忠告しておいてやれば。鈍せは罪だよ

お？ 必ず誰かを不幸にするもんさあ」

にやにやと下卑た笑いを浮かべたまま、忌野童子が言った。

「不幸になるのが坊やなら、よかつたんだけどねえ、俺としては…」

「…なんで…貴子を…どうして俺を狙わない…」

「もちろん、その方が坊やが美味しくなるからわあ

さらり、と忌野童子は言ってのけた。

鈴也は確信した。忌野童子は、とこどんまで鈴也の心を壊そつとしている。鈴也の心の拠り所となるものを全て奪いつくし、絶望に打ちひしがれた精氣を吸う。目的はただそれだけだ。そのために鈴也の両親を殺し、いたずらに鈴也の前をうづつき、貴子を傷つけたのだ。

「もう…いいだろ…十分だろ？」

貴子の体を抱きしめたまま、鈴也が力なくつぶやいた。

「んん？」

「もう…そんな手間をかけなくても…俺は絶望感でいっぱいだよ…」

虚ろな声だつた。

「俺は…いらない存在だとずつと思つてた…」

からん、と鈴也の手から刀が零れ落ちた。

「でも…いらないどころじゃない…こちやいけない存在だったんだ…」

鈴也の存在は、鬼を引き付ける。それだけの精氣を持つてゐる。それゆえに忌野童子に刃をつけられ、両親は死んだ。そして今、貴子が危機に瀕しているのも、鈴也という存在があるためだ。

「鬼の餌としてしか役に立たないなら…もうこ……さつさとやつてくれ…」

(もういやだ。自分のせいで、大事な人間が傷つくなんて、耐えられない)

「あひやひやひやひや！ 墮ちた！ ついに墮ちたね坊やあ！」

感極まつたかのよ^うな、忌野童子の笑い声が夜空に響き渡つた。

「そりだあ、その言葉を10年待つたんだ！ 長かつたよお…長か

つた！ ついに坊やの精氣が、最高に俺好みの味になつたんだあ…」

忌野童子の陶然とした表情を見て、鈴也は気持ちが悪いと思つた。こんな気持ちの悪い奴に吸われるぐらになら、紫炎にありつたけの精氣を吸わせてやればよかつた。味が落ちてしまう前に。

「じゃあ…30分後に町外れの廃ビルまで来てもらおうかなあ…」

「何を…言つてる…？」

「ちょっと野暮用があつてねえ…それを片付けてから、ゆっくり頂くよ…その前に、お嬢ちゃんを御堂本家に届けてやりな？ 御堂と事を構える気はないからねえ…」

忌野童子はそれだけ言い残すと、鈴也と貴子を置いてかき消すようになくなつた。

辺りが突然、静寂に包まれた。

貴子を抱えたまま呆然とする鈴也。もはや、思考能力はない。貴子を御堂本家に届け、廃ビルに向かひ。自分のやるべき事はそれだけだと思っていた。

「だ…め…」

静寂を破つたのは、鈴也の腕に抱えられた貴子の声だった。

「た…貴子…？」

貴子の顔色は依然蒼白だが、うつすらとその切れ長の目を開いていた。

「「」…めんね、鈴也…私…倒せなかつた…」

鈴也はこれまで、貴子の口からこんな細い声を聞いた事がなかつた。

「貴子…お前…何で…」

「何…言つてるの…」

貴子はちょっと困ったように、眉を下げた。

「あいつが…鈴也を狙うから…でしょ…あいつがいる限り…鈴也が苦しむ…」

「な…」

鈴也の頭が、かくん、と下がつた。

「そんなの…ほっとけばよかつたんだ…」

鈴也の言葉に、弱々しく伸びてきた貴子の手が、鈴也のジャケットの襟を掴んだ。

「もう…ないつて…決めたの…」

「何?」

「私は…もつ…鈴也を見捨てないって…決めたの…」

鈴也には、貴子の言っている意味がわからなかつた。誰も自分に関わろうとしたなかつた御堂本家において、唯一自分に話しかけてきたのが貴子だ。見捨てられた事などないはずだつた。

「違う…修行を始めた時…私は鈴也を見捨てたの…」

「それは…」

「鈴也が寂しがつてるのは知つてた…それでも…修行が楽しくて…話すうちに、貴子の目が潤み始めた事に、鈴也は気がついた。「才能があるって…おだてられて…いい気になつて…1人で泣いてる鈴也を見捨てたのよ…」

「貴子のせいじゃないだろ…」

鈴也は、ジャケットの襟を掴む貴子の手を握る。

「鈴也が出て行つて…ずっと後悔してた…」

弱々しくではあるが、貴子が鈴也の手を握り返してきた。

「ひつやつて…握つておけばよかつたつて…」

鈴也が望んだのは、伸ばした手を掴んでくれる存在。だが、貴子は自らその手を離してしまつた。無論、本人には完全に手放したつもりはなかつた。ただ、少し手を離している隙に、鈴也が御堂本家を出て行つてしまつたのだ。

「…鈴也にそうさせたのは…本家の間…と、私…」

貴子の双眸から、ぽろぽろと涙が零れ落ちていく。

鈴也は思う。貴子が後悔する必要など、何もない。貴子が自分で見てくれている事にも気づかず、自分が勝手に拗ねていただけなのだと。

「もういいから…帰つて休め…精気が尽きかけてる…」

そう促すが、貴子は静かに首を振つた。

「…鈴也…あいつの…言つ事に…従つちゃだめ…」

鈴也はこの後、忌野童子の指示通り、廃ビルに向かおうとしている。戦うためなのか、己の身を差し出して、忌野童子の凶行を止めるためなのか、それとも…

「どうしても…行くなら…あの鬼を…悔しいけど…あの鬼の女を…息も絶え絶えの状態ながら、貴子は歯噛みするように言った。紫炎の力さえあれば、忌野童子と渡り合つ事も不可能ではない。どうしても行くのなら彼女を連れて行けど、貴子は言つているのだ。

「ああ…わかった。わかったから、貴子は帰つて休め…」

「」の一週間、常に背後に付き従つていた鬼の姿を思い浮かべながら、鈴也は虚ろな瞳でそう応えていた。

死んでませんよ?

貴子を御堂本家に送り届けた時、伯父である錦三は驚くほど冷静だった。ひつたくるように貴子の身体を受け取り、屋敷の奥に運ばせると、鈴也に向かつて一瞥もせずに告げた。

「…消えろ」

立ち去れ、という意味でない事は、声の響きでわかつた。伯父は自分を追い払いたいのではない。自分の存在そのものを消し去りたいのだ。

家名に泥を塗る存在である鈴也も、貴子が傷ついたという事実も。いくら次期当主として期待されるだけの素質を持っているとはいっても、貴子はまだ経験も浅い、新米伏鬼衆に過ぎない。彼女が簡単に伏滅できるような相手ならば、鈴也の両親が殺される事もなかつただろう。さうに言えば、鈴也の両親が死んだ時に、御堂の力を結集してその場で伏滅しているはずだ。

つまるところ、伏鬼の名門たる御堂家にとつて、忌野童子は手を出すにはリスクの高い相手だった。だから錦三は忌野童子の追跡をせず、鈴也ら親子の存在を隠した。そんな鬼に貴子が敗れた事は、必然である。

錦三が問題にしているのは、貴子が忌野童子に敗れた事ではなく、貴子が鈴也の巻き添えを食つてしまつた事だけなのだ。

「……わかりました…消えればいいんですね」

鈴也は錦三にそれだけを告げると、足早に御堂本家の屋敷から遠ざかつて行つた。

「もう…なんにもない…」

夜道を歩く鈴也の口から、ぽつりと言葉が漏れた。

自分のやつている事は、ちぐはぐで的外れなのだろう。

妄執に取り憑かれるように忌野童子を追い掛け回しておきながら、

実際には手も足も出ない。自分の事を気にかけてくれた貴子を邪険に追い払った拳句、結局傷つけてしまった。忌野童子に対抗する唯一の力であった紫炎まで、下らない意地で遠ざけている。

何がしたいのか、自分でもまったくわけがわからない。

「これじゃ駄々っ子だ…」

あれが欲しい、これが欲しいとわめき散らして、本当はそれを持っていた事にも気づかずに、かんしゃくを起こして大事なものを投げ捨ててしまった。自分が不幸のような顔をして、貴子の思いにも気づかず。

「もういい……全部……終わらせよう……」

全てを諦めきったような表情だった。今の自分の命が、両親の犠牲によつて成り立つている事も、貴子が何とか守ろうとしたものだという事も、鈴也の頭の中にはなかつた。ただこれ以上、忌野童子の呪縛の中で生きて行く事が、できそうにないと思つた。

鈴也の足は、力なく進む。忌野童子が指定してきた廃ビルに向かつて。

そのビルは、感知能力の低い鈴也から見ても、異様な雰囲気に包まれていた。ガラスのない窓からは絶えず、どす黒い瘴気が漏れ出していて、気分が悪くなりそうだ。

忌野童子に指定された廃ビル 恐らくは彼の根城。

ガラス張りの扉を抜けると、中はさらにひどい瘴気が立ち込めている。ガラスの破片や、抉れた壁がゴロゴロと転がつて、取り壊されていないのが不思議なくらいだ。もともとオフィスとして使われていた部屋なのだろう。よく見ると、デスクや電話の残骸なども落ちている。

思わず足を踏み入れるのをためらう鈴也に、聞き覚えのある粘ついた声が飛ぶ。

「やあ……わが城へようこそや、ほつやあ……」

忌野童子はフロアの奥にある、粗末な椅子に座っていた。トレンチコートの襟を立て、その奥から空洞のような、感情のない目がじっと鈴也を見つめていた。

田の前に、憎い仇がいる。ニヤニヤと、嫌な笑いを浮かべて。

「……」これが、お前の望んだ結末ってわけだ……」

鈴也は、自分の声がひどくかすれている事に気がついた。今の鈴也に、怒りの感情はない。ただ虚無感があるだけだ。

「いやいやあ……予定外さあ……」

肩をすくめ、首を振る鬼。

「御堂に追い払われて、坊やを見失つてから10年もかかったねえ……それで見つけてみたらどうだ、妙な鬼がくつついてる上に、清々しい精気になつてやがる。おかげで、また面倒な計画が必要になつちまつたぜえ……」

妙な鬼、といつのは紫炎のことだろ？

「計画だと……？」

「そうさあ……わざわざ危険を犯してまで坊やの前に姿を見せて……精氣の味を落としてやつたのを……あの鬼の口に、合わなくなるよつにねえ……」

確かに、忌野童子と出会つてから、紫炎は鈴也の精氣の質の低下を気にし始めた。それさえも、この鬼の仕組んだ事だつたというのか。やうに、貴子を狙つつもりがあると匂わせる事で、鈴也に自ら貴子を遠ざけさせた。

「毎晩悪夢を見せて……少しずつ腐らせていつた……ほんと、面倒かけてくれたよあ……」

なるほど、と鈴也は思う。彼女と仲たがいさせることで、確かに鈴也の精氣はさらに質が落ちたに違いない。何せ、再び孤独の淵に叩き込まれることになったのだから。

「後は、俺に挑んできたお嬢ちゃんの惨めな姿を見せてやつた……い

「やあ、色々面倒だつたあ…」

忌野童子は天を仰ぐように、大きく息を吐いた。

「でもその甲斐あつて… やつと美味そうな精気になつたよ… 嬉しいねえ」

「一応言つておくが、大人しく吸わせてやる気はねえぞ？」

鈴也が口にしたのは、精一杯の強がりだつた。鈴也の力が及ぶ相手ではないし、頼みの綱の紫炎もここにはいない。

「わかつてるよお… 待つてゐんだら、あいつをさあ？」

にい、と耳まで裂けた忌野童子の口が、半月形にゆがむ。笑つてゐるのだろう。

（こいつ… 紫炎が来ると思つてゐるのか…？ 来るわけないのに…）
鈴也は首をひねつた。そもそも2人を仲たがいさせたのも、忌野童子本人のはずだ。

「ほうやあ、これが何かわかるかあ？」

忌野童子はコンクリートの床の上に、無造作に何かを放り投げた。黒い布にくるまれた、棒状のものだ。黒布から、白い液体が染み出している。

それが何かはわからない。だが、黒い布には見覚えがあつた。今田の夕方まで、何かというと自分の体に巻きついていた布だ。正確に言えば、巻きついていたのはこの布に包まれた「腕」だ。

「ま…まさか…」

ふらつく足取りで、鈴也は床の上のものに近づく。

「紫炎の…！？」

布の端からはみ出していたのは、白く細い指だ。間違いなく、それは二の腕あたりで切断された紫炎の右腕だつた。

「くふふふ… あれほどの強力な鬼が、それはそれは惨めな姿だつたぞお！」

何が起つてゐるのか、鈴也には理解できなかつた。先ほど別れ

た紫炎の腕が、なぜここにある？　なぜ忌野童子が、あんなに強い紫炎の腕を持つている？

「…紫炎があ前ごときに…」

慌てた鈴也だが、絶望感を抱くほどでもない。相手に気づかれないように、ゆっくりと呼吸を整える。

確かに切断された腕は痛々しいものの、それぐらい紫炎にとつてはどうということはないはずだ。なぜなら、紫炎は鬼なのだから。鈴也は漠然とそう思った。それは予想などではなく、単なる希望的観測に過ぎなかつた。

「まあねえ…万全であつたら…なあ？」

「なに…？」

「いやね？　お前の精を思つがままに吸つておれば、俺ごときにやられる奴ではなかろうねえ…」

忌野童子の言葉に、鈴也の眉がぴくりと跳ね上がる。もしかすると自分は、取り返しのつかない過ちを犯してしまつたのではないか、と。

「どういう意味だ…？」

「ぼうやはさあ、鬼がこの現世で力を保つのに、どれほどの精を要するか知つてるかあ？　人間一人の精で、どれだけの力が保てるか？」

「知らないね。知りたくもないぜ、そんなこと？」

嫌な胸騒ぎが、ぞわぞわと全身に広がっていく。ちらりと頭をよぎつた疑念が、明確な形を取りつつあつた。

「いひひひひ、鬼と契つておきながら、残酷なことを言つものだなあ！」

おかしくてたまらない、といった表情で、忌野童子が哄笑する。

「教えてやるやつ……3日さま」

ぐらり、と世界が揺れたような気がした。

「人間一人の精を廃人になるまで吸い尽くして、よつやく3日よ」
鈴也の疑念は確信に変わつた。

「奴はどれだけお前の精氣を吸うたかねえ？……あれだけの鬼だ、必要な精氣も多かるうなあ？」

目の前の鬼が、いびつな笑顔を見せている。鈴也は言葉を失っていた。

紫炎が本氣で精氣を吸つたのは、最初の1回を含めて3回ほどだつただろうか。身の危険を感じた鈴也の提案により、それ以降はわずかずつしか吸つていないはずだ。鈴也は、紫炎がそれで満足していると思い込んでいたのだ。

いつたい、あの鬼の美女はどれだけ己の欲求を抑えていたとか。一体自分は、どれだけ彼女を苦しめ、その力を殺いでいたというのか。

鈴也の頭はぐらぐらと揺れ、絶望に膝が折れた。その場に崩れ落ちるように座り込んだ鈴也に、鬼はゆっくりと近づいてくる。

「勝手なものよなあ、ぼうや。死なない程度に餌を与える、鬼の力を利用するかよ。奴にとつて伏鬼に助力するのは、同族殺しに他ならぬというのになあ……」

（なんてことしちまつたんだ、俺は……『契約』だつて、俺から言い出したのに……）

「鬼を人間の社会に縛りつけ、人間の都合を押し付け、用が済めば放り出す……我ら鬼よりよほど外道ではないかねえ？」

「あ……ああ……」

鈴也はいまや両手で顔を覆い、うずくまつていた。

「ほうほう、またしても美味そうな匂いだあ。よほどの絶望を味わつたのだな……どうだ、そろそろ死ぬ気になつたかねえ？」

忌野童子は楽しくてたまらない、といった声で言いながら、ゆつくりと近づいて来るが、鈴也はつむいたまま動かない。甲高く耳障りな声が、不思議なほど遠く聞こえた。

（紫炎……紫炎……俺が……俺のせい……）

「へひつ……壊れたか？」

「し……え……ん……」

乾いた声が、虚ろに響く。

「呼んだか、鈴也」

絶望に彩られた鈴也のつぶやきに、鈴のよつつな声が応えた。

「呼んだか、鈴也」

凛とした声が、ガラスのない窓から響く。

そこには、月光を背に世にも美しい鬼が立っていた。白い髪が月の光を受けてキラキラと輝き、その神々しさは月の女神のようだ。

「し……紫炎っ！」

物音も気配も、まったく感じさせずに、紫炎はビルの中に入ってきた。

「お前……無事だったのか！？」

「大事無い」

事も無げに言つてのける紫炎。だが、その右腕は二の腕から先がなかつた。

「お前……なぜここに……」

呆然と鈴也が問うと、紫炎はきょとん、とした表情を浮かべた。以前と同じ、鈴也のお気に入りの表情だった。

「私が鈴也の守護者だからだが」

「え？」

言われてみれば、紫炎は鈴也の前から姿を消したもののは、『契約』自体を破棄した覚えはない。

「お前……今までどこにいた？」

「すぐそばにいた。鈴也の視界の外に」

「ずっと俺の近くに隠れてたのか？」

紫炎は、そもそも当然といつよつて、黙つてうなづいた。

「チッ……」

いまいましげに、忌野童子が舌打ちする。

「しつこいねえ……さつき、実力差を見せてやつたるうつ……」

キュー、とタイル貼りの床が音を立てた。忌野童子が、両足に力を込めた音だ。それに対して紫炎の方は、すう、と音もなく鈴也の傍

らに移動する。

「紫……」

「動くな」

静かな命令は、忌野童子の口から発せられていた。それだけで、しゃがみこんでいた鈴也の全身が硬直する。

「ぐつ……ー？」

「もう我慢の限界なんだよ……どれだけ俺を苛立たせたら氣が済むんだあ……？」

気がつけば、忌野童子の両目が金色に光っていた。鈴也が指一本すら動かせないのは、何らかの妖術を使っているせいらしい。

「すぐに片付けるからじつとしてなあ、お前は俺の餌なんだからさあ……」

忌野童子の視線は、紫炎に向いている。だが、鈴也にかかる術は解けない。

「違うな」

紫炎が言つた。やはり精気が足りないのか、その声には張りがない。

「鈴也はお前の餌ではない」

紫炎が鈴也の前に立ちふさがり、警戒するかのように忌野童子が一步後退する。

「私の『契約者』だ」

ずしり、と紫炎の言葉が鈴也の胸にのしかかる。必要最低限の精氣すら『えられなかつた自分を、それでも紫炎は『契約者』と呼んだのだ』。

「……餌もろくにくれないのにかあ？」

その問には答えず、紫炎は床に落ちていた自分の右腕を拾い上げる。切断面をくつつけてみると、繋がる気配はなかつた。

「ほおら見ろ……治癒力が落ちてるんだよ……精気が足りなくてなあ……へひひ、今のこいつの精氣じや、吸う氣にもなれないだろお？」

今の鈴也の精氣は、自らの短慮と忌野童子の策略によつて、腐り

きっている。たとえからだが動いたとしても、紫炎の力になれるとは思えなかつた。

「自分で汚しておいてよく言ひ……下手物食ひが」

「へへえ、言うねえ……今度は右腕一本じゃ済まさねえよお？」

しゃきん、と音を立てて、忌野童子の爪が一瞬にして伸びた。單なる爪ではない。太く、それでいて鋭い、立派な武器だ。

「しゃああつ！」

鋭い掛け声と共に、忌野童子が爪を振るひ。以前の紫炎なら、軽々と受け止められた攻撃だ。だが、紫炎の身体は微動だにしなかつた。

ざくり。

紫炎の左の肩口に、爪が深々と突き刺さつていた。しぶきのようない、白い液体が宙を舞う。鈴也は、その白い液体が紫炎の血だとう事に気がついていた。

「紫炎つ！ なんで……！？」

鈴也の前に立ちふさがつた紫炎は、まさに棒立ち状態だ。敵の攻撃を防ぐ素振りも、避けようとする『気配すらない』。

「……無理だ」

「無理……？」

「今私の力では、この下手物食ひに抗うべくもない」

手も足も出ないから、何もしない。紫炎はそう言つていた。

ここ一週間、まともに精氣を吸つていかない。そんな状態では、立つている事すら困難なのではないか。

「ひやあはははー、ぶぞまだなあー！」

ざくり。

一度引き抜かれた爪が、再び突き刺さる。

「お前…そんな状態でなんで来たんだよ…」

泣きそうな顔で叫ぶ鈴也。

「……？」

「力も出ないのに…何で俺を助けに来るんだよ…逃げろって！」

ざくづく。

「…守護者だからだと書つたが」

平然と応える紫炎。

「やめろっ！－！」

いつの間にか、鈴也の頬を涙が流れていった。

ざくづく。

「俺は…俺はただ消えればよかつたんだ！」

伯父の言つとおりに。

ざくづく。

「俺にはお前に守つてもう価値なんかない…」

自分を守るために、両親が死んだ。貴子が傷ついた。自分はまだ存在するだけで、周りの人間を傷つける。紫炎が今傷ついているのも、自分が精気を与えなかつたからだ。『契約者』であるにも関わらず。

だが、この美しき鬼は鈴也の叫びに、静かに首を振つた。

「私にとつての鈴也の価値は…私が決める

「しぶといねえ…ああ…つとおしげー！」

ざくづく。

気がつけば、紫炎の黒衣からは、とめどなく白い液体が流れいた。これ以上攻撃を暗い続ければ、いかな鬼とて無事ではすまないはずだ。

「もういい、やめる紫炎！俺のことはいいから、逃げるんだ！！」
鈴也の悲痛な叫びが聞こえないのか、紫炎は忌野童子の前をどこうとはしない。千切れた左腕を口にくわえ、無防備にただ、鬼の攻撃の前に身を晒している。

忌野童子の爪が紫炎の肉をえぐり、白い異形の血を撒き散らせ、白磁のようだった肌はもはや白い血でぬらぬらと光り、血液を失ったことで透き通るようになっていた。もしかすると、もう逃げることすらできないのではないだろうか。

死ぬ……紫炎が死んじまつ……！

いかな屈強な鬼といえど、力の大半を封じられた以上、紫炎が力尽きるのも時間の問題だった。

「同じ事だ……」

血にまみれた口元が、かすかに動いた。

「鈴也なくして……人の世になど留まれん……」

紫炎の肩口の肉が勢いよく弾け飛び、白い血煙が靄のように室内を埋め尽くしていく。

「鈴也を失うも、ここで死ぬも……私には同義」

「なんで……なんでそこまで……」

凄惨な姿をさらす紫炎を何とかしようとして、立たぬ足腰を叱咤する。だが、鬼の術にかかつた体は思つように動かない。

「……食えぬのだ……鈴也以外の精を体が受けつけない……」

「え……？」

鈴也は、紫炎が単にえり好みをしているだけだと思つていた。質

の低い精気など口に合わない、ただそれだけの事だと。

だが違つた。紫炎は、鈴也の精氣しか取り込めなくなつていたのだ。鈴也がいなければ、この美しい鬼は生きていけないのだ。

「うん…しぶといねえ…面倒だよ…そろそろ死なんかねえ？」
忌野童子の爪が、どす、という音と共に紫炎の背中にめり込んだ。
ごふ、と苦しげにうめき、紫炎の口から白い液体があふれ出て、鈴
也の頭を濡らす。

(目 次)

自分を抱きしめたまま、背中を貫かれた母の姿が、鈴也の脳にフラッシュバックする。

鈴也の口から絶叫がもれた。

（また、また死んでしまう。俺を守るために、また大事な人が…）
がたがたと震えながら、ゆっくりと、本当にゆっくりと鈴也の右手が持ち上がる。握った刀は、今にも取り落としそうだ。
だが、落とさなかつた。闘う力を持たない自分が、たつた一つできることを為すために。

「アリス、おめでた！」「うーん、うれしいなあ。」

忌野童子の口調は変わらない。自分の絶対有利

志野草子の口語に交じらない自分の絵文有りが重かない。しているからだね。だが、鈴也は聞き取つた。自分の呪縛を打ち破るうとする鈴也の姿を見て、鬼の声にわずかな動搖が混じつたのを。

「「」の……っ！」

ぴくり、と鈴也の指が動いた。明らかに、自らの意思で。動かせる 鈴也の全身を、安堵と歡喜が駆け抜けた。まだ、自分達にはこの窮地を脱する方法が、残されている。

「このつ……！」

鈴也は自らの意思を全て右腕に込め、刀の柄を逆手に握り直す。「……「」の、食道楽がああ……！」

鈴也は震える体にあらん限りの力を込めて、刀を自分の腿に突き立てた。足に激痛が走る。だが、それと同時に鈴也は、自分の足が感覚を取り戻していることを確信した。

「いつてええええ……！」

「なあんだあ……？」

自らの声に弾かれるように、鈴也は立ち上がっていた。何が忌野童子の呪縛を打ち破ったのかはわからない。そんなことはどうでもいい。重要なのは、鈴也が自分の意思で立ち上がっていることだ。あとは、もう少しその足を動かせばいい。

「……何をしている

忌野童子の攻撃から鈴也をかばいながら、呆然と紫炎がつぶやく。その声を無視して、鈴也を足を引きずり、ゆっくりと歩み寄る。いまだ自由にならない腕を必死に持ち上げ、手のひらで紫炎の頬を包んだ。

「すす……んむつー？」

言葉をさえぎるよつこ、紫炎と鈴也の唇が重なった。

(殺させない…俺も死ねない…好きなだけ持つてけ…)

欲情した人間の精気がその質を増すのは、種としての生存本能が高まるからだ。ならば、死に瀕した状態なら、種ではなく、個としての自分の生存本能に、鈴也は賭けた。

「なんだとお！？」

忌野童子の顔が、驚愕に彩られていく。

みるみるうちに、鈴也の体から力が抜けていく。崩れそうになつた鈴也の体を支えたのは、紫炎の腕だ。ちぎれていたはずの右腕もいつの間にか再生し、両腕で鈴也を抱きしめている。もちろん、それ以外の傷もすべて、綺麗にふさがっていた。

紫炎はゆつくりと唇を離すと、ほう…と悩ましげな息を吐く。

「ま…満足した…かよ…」

「ああ……たまらない…たまらないな、鈴也は」

「つゝとつと閉じられていた紫炎の目が、すう、と開いた。その双眸は鬼の力を示すように、真つ赤に輝いていた。抱き合つて二人を包むのは、ゆらゆらと立ち上る紫の炎。

鈴也は、賭けに勝つた。それはもう、大勝　いや、むしろ勝ちすぎと言つていい勝ちっぷりだった。

「気に入らないねえ…せつかく腐らせた、ぼつやの精気がさあ…」

忌野童子の目が、殺意に満ちていぐ。これまでのような遊び半分ではない、本物の殺意、そしてどす黒い鬼気。

だが、鈴也の守護者はその強烈な鬼気を、平然と受け流した。赤い輝きが漏れる眼をすう、と細め、ペロリ、と舌で唇をなめる。

「礼を言おう、忌野童子とやら

「ああ？」

「貴様の策がもたらした、極上の精…ああ、私はここに、最上の伴侶を得た」

鉄面皮をかくや、といつ無表情な紫炎の頬が、ほんのりと紅く染まっている。陶然とした表情と口調で、自らの体内を巡るものを感じているかのよう……鈴也の精氣を。

「人の獲物を横取りしておいて、言つてくれるねえ……ああー!?」

忌野童子の爪 鈴也の母を貫いた爪が、紫炎を襲う。スピード、タイミングともに、完璧な一撃。さきほどまでの、なぶるような攻撃とは勢いが違っていた。

「くふつ」

微笑のような、小さな吐息を漏らした紫炎の纖手が、軽々と忌野童子の手首を掴んでいた。間近で見ていた鈴也にさえ、何が起つたのか判らない速さだ。

「くふふふふふ、ああ…愉快だ」

今度の声は明らかに、笑いだつた。紫炎の唇から、笑い声が漏れている。明らかに、これまでの紫炎と様子が違つていた。

(なんか…酔つてねえか?)

へたりこんでいた鈴也が、そんな感想を抱いた次の瞬間、ぶちん、と奇妙な音がした。

「ぎやがあつ!?

それは、悲鳴だつた。忌野童子の手首から先がなくなつていた。いや、手首は紫炎の手の中にあつた。力任せに、引きちぎつたのだ。

「感謝はしているが…許せぬ事もある」

口元だけは笑みにゆがめたまま、紫炎は同族を睨む。

「なんだあ…てめえ…何者だあ…?」

忌野童子の口調に、明確な動搖が走る。これまでの永い生涯において、自分をこれほどまでに圧倒した存在を、彼は見た事がなかつた。

「ありえねえ…ありえねえよお…!!」

驚愕を覚えながらも、忌野童子は攻撃態勢を整えようとしていた。自らの角を掴み、ずるずると引き抜いていく。どうこう仕組みなんか、引き抜いたそれは巨大な刀だつた。

「てめえみたいな鬼はあ…知らなねえぞお!…」

口調は間延びしているが、斬撃は鋭かつた。おそらく、かつて紫

炎の腕を斬り落としたのは「」の武器だろ？。直感的に、鈴也はそう思つた。

「くふつ…あほ！」

あの時と、極上の精気がみなぎる今では、状況が違う。絶対の自信をもって振り下ろされた忌野童子の角刀は、紫炎の細い指2本で受け止められていた。

「な…あ？」

「我が名を知らぬは無知が故。私の知った事か」

ぱきん、という甲高い音とともに、忌野童子の刀 鬼の象徴たる角は、飴のように、ぽつきりと折れた。

「もういい…去ね」

折れた刃をつまむ左手はそのままに、残つた右手が忌野童子の頭部を掴んだ。バスケット選手が、ボールを片手で掴むような、無造作な仕草だった。

「あきつ…！」

奇怪なうめき声。恐らく紫炎の細い五指には、想像を絶する力が込められている。なぜなら、その指先はメリメリと嫌な音を立てながら、忌野童子の頭に食い込んでいたから。

「おまえは…おまえはいつたい…何もの……」

「去ねと言つた」

びしゃつ。

「ふぎやあつ…！」

濡れた音が響き渡り、黒い液体が飛び散つた。紫炎が、忌野童子の頭を握りつぶしたのだということに、鈴也は遅まきながら気がついた。気がつくのに時間がかかったのは、そんな倒し方が存在すること自体、鈴也 ひいては伏鬼衆の想定外だからだ。

（我ながら、とんでもない奴と契約しちまつたもんだ…）

精気を限界近くまで吸われ、朦朧とした意識の中で鈴也は思った。勘違いから自分と契約してしまつたこの美しい鬼は、どうやら規格外の力を持っているようだ。同じ鬼である、忌野童子が恐怖を感じ

るせぶり。

「鈴也」

気がつくと、紫炎が鈴也に向かって、右手を差し伸べていた。つかまれところのだらう。

「できれば…逆の手にしてほしい」

差し出された手は、鬼の頭を握りつぶし、返り血で真っ黒に染まっていた。それを見ながら、鈴也は「鬼つて個体によつて血の色が違うんだなあ」などと、場違いなことを考えていた。

紫炎は気にした風もなく、つまんでいた刃をポイ、と放り出し、左手を改めて差し出してくる。その手を掴み、よつよつ立ち上がる鈴也。

「ところで紫炎さ…わつき言つてた『許せない』ことって何だ？」

一瞬、鈴也の問ひの意味がわからず、きょとんとした表情を見せる紫炎。凄絶な美貌に似合わぬこの表情を、鈴也は何となく気に入つてゐる。噂に聞く、『ギャップ萌え』といつやつだらうか。

「感謝してることで許せない、って言つてたじやん」

「無論、許せん。彼奴は鈴也の体に傷をつけた」

紫炎は鈴也が自らの刃を突き立てた足を指差した。

「いや…これ、俺が自分でやつたんだけど?」

「彼奴のせいで傷ついたことに変わりない」

心なしか、鈴也にしかわからぬにほどわずかに、ムスッとした表情だった。

「あの雌との約定」とき果たせなことは、私の『ふらごど』が許さない」

『約定』といつのは、恐らく貴子と交わした「鈴也をちゃんと守るんでしょうね」という言葉の事だらう。

「また、変な言葉覚えたなあ…」

苦笑いしつつ、鈴也は紫炎と共に帰路につく。紫炎に肩を借りて、というのがいさか格好がつかないが、落ちこぼれの自分としてはこんなもんだらう、とも思った。

とにかく、両親の仇討ちは果たされた。自分の手による結果ではないけれど、そんな事はどうでもいい。これで両親の魂が救われるとも思わないし、御堂本家が自分に対する態度を改めるとも思えない。ただ、妄執だけを胸に生きてきた、空っぽの自分に対するけじめにはなるだろう。これからは一人じゃない。空っぽなら、今日から埋めていけばいいだけのことだ。

少なくとも、自分に肩を貸してくれている美しい鬼は、自分の心を満たす存在たりえるのだと思う。そして恐らくは、貴子も。

今はそれでいい。これからることは、これから考えればいい。足は痛み、精気の欠乏によりふらふら…満身創痍の様相ではあるが、鈴也の心は不思議と晴れやかだった。

落ちこぼれの自分のそばには、いつも最強の美鬼がいる。
それだけは、間違いないのだから。

あつけなすぎたか

「ちょっとあんた、いい加減にしなさいよ！…」

鈴也のマンションのリビングで金切り声を上げるのは、御堂貴子。その声を涼しい顔で受け流し、鈴也を抱え込むのは最強の鬼、紫炎。貴子はしばらく休んだだけで、回復したようだ。復調するなり、鈴也の部屋に押しかけて紫炎と一戦を開始してしまった。

「鬼のくせに、伏鬼衆を相手になれなれしくしてんじゃないわよ！

！」

鈴也に対する後ろめたさを告白したからなのか、その執着心は以前に増して大きくなつていいよつだった。そして、それは紫炎も同じだった。

「つるさい、人間の雌」

「誰が雌よ！… 鈴也を離せつて言つてんでしょう！」

恒例となりつつある、貴子と紫炎の諍いを前に、鈴也はなすがままを決め込んでいる。自分よりはるかに強い2人のケンカに割り込むなど、自殺行為もいいところだ。

「断る。鈴也は私のだ」

「勝手なこと言つてんじゃないわよ！… 鈴也は御堂の人間なんだから、御堂家次期当主の、わ、わ…わたしのよ！…」

「…ちゅ」

「人が話してるそばから何キスとかしてんのよ… 離れろつ！…

「…おやつ」

(「うーん、どうでもいいけど、俺の意思はどこにあるんだろうか… まあでも、御堂家の駒になるぐらいなら、おやつの方がマシかなあ… どっちもどっちとも言えるけど)

2人のののしりあいを聞きながら、鈴也はぼんやりとそんな事を考えていた。

鈴也の両親を殺した鬼は滅んだ。結局、鈴也自身が手を下すことなく、したがつて御堂本家からの評価が上がるようなこともなく、鈴也の立場はこれまでと何一つ変わらなかつた。もちろん、貴子の計らいによつて、紫炎の存在は徹底的に隠匿された。どこまで隠し通せるかはわからぬが、少なくとも現時点では御堂本家は、これまで通り鈴也の存在を黙殺することに決めたようだ。

ただ一人の例外を除いて。

その頃

「長らくお世話になりました、つと！」

一人の女性が御堂本家の門扉を開き、踊るような足取りで飛び出していた。

歳の頃は20代の半ばといったところだろうか。顔立ちは怜俐な雰囲気を持っているのだが、満面に浮かべた笑顔がその印象をぶち壊している。その表情を言葉にすれば「嬉しくて仕方がない」とでも言つた雰囲気だった。

手には大きな旅行カバンを持っている。服装は、御堂本家では珍しい洋装。丈の長い紺のワンピースに、白いエプロンドレス。いわゆるメイド服というやつだ。もちろん、ちまたのメイド喫茶に溢れているような、安っぽい仕立てのものではない。

「ふう…やつと出て来れた！」

彼女の名は桐原早紀。誰あつ、御堂本家の家政婦である。正確には、30分前までは、だが。

「長かつたわあ…あれから3年、お金も十分たまつたし、円満退職もできたし…」

聞く者とてないまま、彼女は楽しげにつぶやいている。つまり独り言である。

「こんな長い間……あなたを独りにしてしまった早紀を、どうかお許しくださいね……」

祈るようなポーズを決め、さらにはグッと拳を握りしめる。

「今行きますから、待ってくださいね、鈴也坊ちゃん」

彼女はまるでスキップするかのように、軽やかに歩き出した。向かうのは、鈴也の住むマンションの方角だった。

鈴也を無視しない、ただ一人の例外　それは、貴子のことではない。

新たなる波乱の予兆を含みながら、本章の幕とする……。

22（後書き）

これにて第1部完結で「」をいします。

お付き合いいただいた方に多大なる感謝を。

第2部に関しては、まあ反響があれば考えると
いう事で。今は空っぽです。

お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2761w/>

落ちこぼれと美鬼

2011年10月18日21時55分発行